二ツ小屋御駐輦記念碑の和歌について

――大正天皇（嘉仁皇太子）と御駐輦記念碑設置経緯――

大滝会　特別会員　鹿摩貞男
（万世大路研究会）

万世大路（旧国道 13 号）二ツ小屋隧道福島側坑口の前に御駐輦記念碑（鳳駕駐蹕之蹟）が設置されていて和歌が刻されている。このたびその和歌の解読を試みていただいたので紹介する。また、記念碑は旧信夫郡中野村が設置した（明治 41 年〔1908 年〕9 月 12 日）ものであることが判明したのでその経緯についても報告する。

はじめに

御駐輦（ごちゅうれん）記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」**(注)**とは、明治天皇が御小憩されたことを（御駐輦）記念する石碑のことである。万世大路（旧国道 13 号）には、明治 14 年〔1881 年〕10 月の行幸の際に御小憩された旧信夫郡中野村村内の 3 箇所にほぼ同様の石碑が設置されている。

それは、米沢側から二ツ小屋地区（二ツ小屋隧道福島側坑口前）、大滝胡桃平地区、円部地区の 3 箇所である。これらの記念碑はほぼ同形状で、字体は異なるけれども碑文内容も同じである。しかし、二ツ小屋地区の御駐輦記念碑には設置年月日がなく替わりに和歌が刻されている。この和歌は草書体の達筆で刻されているうえ欠けている部分などもあり、我々には解読出来なかったものであるがこのたび解読を試みて頂いたので紹介する。現在までのところ当該和歌の内容を記した文献史料等は見つかっていない。

この 3 箇所の御駐輦記念碑については誰が何の目的で、明治 41 年 9 月 12 日という日付を選んで設置したか、予てから大いなる謎であったけれども、これらが旧信夫郡中野村によるものであることを示す文献史料等を見つけたので、その経緯及び文献内容についても併せて紹介するものである。

（注）　鳳駕駐蹕之蹟（ほうがちゅうひつのせき）

鳳駕＝天子の乗り物、駐蹕＝天子が行幸の際、車を止めること、蹟＝物事のあったあとかた、事蹟･史蹟。蹟はアトとも読むが本稿では音読みのセキとしておく。すなわち明治天皇が乗り物を止めてお休みになった所（史蹟）という意味である。輦（れん）は天子の乗物。

なお、添付写真はクレジットの無いものは筆者撮影分もしくは大滝会、万世大路研究会提供のものである（写真説明末尾の英数字は撮影年月日）。また、万世大路の全体及び御駐輦記念碑等の配置を示す略図を巻末に添付したので参考にされたい。

和歌の解読

二ツ小屋地区（二ツ小屋隧道福島側坑口前）の御駐輦記念碑には前述の通り和歌が刻されており、その作者は、旧中野村の中野吉平と伝えられている**(注)**。しかし、その内容については長らく不詳であったが、この度次のように解読して頂いたのでまず冒頭に紹介する。

たてまつる　いにし御幸（みゆき）の　跡とめて
万世（ばんせい）までも　くちぬ石ぶみ　　寛拝

【碑原文】　たて末つ留いにし御幸の跡と免て
萬世ま伝もくちぬ石ふみ　　寛拝

和歌の大意は「奉ります。過ぎし行幸（ぎょうこう）の跡をとどめて、幾久しく永遠に朽ちぬこの碑（いしぶみ）を。寛拝す」。和歌中の「万世」は「万世大路」に懸けたものであろう。

なお、刻字は欠けているものもあるため一部推定している。

碑文の解読・大意は、明治神宮･国際神道文化研究所打越孝明主任研究員によるものである。

（注）中野吉平の和歌

1）和歌の作者は「左側面（筆者注：現地は右・側面）に同村（筆者注：旧中野村）**中野吉平の和歌**を刻した角柱形の記念碑が建ててある。」（太字筆者）と伝えられている。
（『明治 9 年明治 14 年明治天皇御巡幸録』福島縣教育會　昭和 11 年〔1936 年〕10 月 1 日、188 頁）
（※本書は行幸 60 年記念出版。行幸：明治 9 年〔1876 年〕6 月 13 日、明治 14 年〔1881 年〕6 月 7 日、10 月 3 日）

2）『福島県直轄国道改修史』（建設省福島工事事務所　昭和 40 年 3 月、84 頁）には、上記とほぼ同文の記述がある。出典は明示されていないが前掲書と思われる。

3）明治 4 年（1871 年）、新政府は廃藩置県を断行（7 月 14 日）、戸籍法の公布（4 月 4 日付け布告）がなされ、旧福島県（現中通り）は「区の設置」（明治 4 年 4 月 4 日）により区制をとることとなった。信夫郡 8 区、伊達郡 5 区、安達郡 3 区からなり、各区に戸長兼郡長若しくは準郡長が配された。信夫郡第 3 区に下記のように中野吉平の名が見える。同一人物であろうか。
第 3 区　戸長兼副郡長　中野吉平（第 3 区構成村：北沢又村、飯塚村、平田村、**中野村**等 11 ヶ村）
（『福島市史　第 4 巻近代Ⅰ、通史編』福島市教育委員会　昭和 49 年 3 月 30 日 21 頁）

4）旧中野村の村長・助役を歴任か。
中野吉平：大正 9 年 11 月～　中野村助役、大正 11 年 7 月～同 15 年 6 月　村長の記載あり。
（『福島市史　第 13 巻　索引年表』福島市教育委員会、昭和 51 年 3 月 31 日　513 頁）

（【写真 1-1～4】）

【写真 1-1】
二ツ小屋御小休所御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」
（明治 41 年 9 月 12 日設置）。
正面 **「鳳駕駐蹕之蹟」**（楷書）
右･側面には和歌（作者：旧中野村中野吉平）。
左･側面には**「明治 14 年 10 月 3 日　御通輦」**。
背面は無刻、地のまま。　H301110

【写真 1-2】
二ツ小屋御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」
右･側面の和歌（作者：旧中野村中野吉平）
打越孝明様提供　R021105

【写真 1-3】
左･側面　刻字
明治十四年十月三日
御通輦
R021105

【写真 1-4A】
二ツ小屋隧道福島側坑口全景
中央付近に御駐輦記念碑「鳳駕蹕之蹟」が見える。
H301110

【写真 1-4B 】

右側階段上の石碑　山神様
（裏面明治十四歳十二月）
H300714

御駐輦記念碑の設置経緯

〈文献史料について〉

筆者が、万世大路に関心を持ったのは高校生の頃からであったが、本格的に調査を始めたのは仕事（第 2 の職場）を辞したこの 10 年前くらいからであろう。その際に二ツ小屋隧道など万世大路山間部を何十年ぶりかで訪れ、また大滝御小休所御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」とは、高校卒業（昭和 38 年）以来の再会であった。それ以降、御駐輦記念碑が何の目的で誰が設置したのか、ずっと疑問に思い続けていて文献史料を渉猟したり、大滝御駐輦記念碑では敷地所有者の旧中屋旅館（大滝御小休所）ご当主や大滝会の皆様にお尋ねしたりしたけれども分からないとのことであった。

なお、『栗子トンネル工事誌』（建設省福島工事事務所　1968 年 7 月、1230 頁）中に福島県において設置したという記述がありこれが唯一の関連史料であった。しかし、御駐輦記念碑は旧中野村の 3 箇所だけにしか設置されておらず、大笹生村御小休所跡には設置されていないことから福島県による設置ではなく、旧中野村単独の設置ではないかと考えていた。**（【写真 1-5】）**

【写真 1-5】
二ツ小屋記念碑（鳳駕駐蹕之蹟）敷地が福島市役所市有地（旧中野村村有地）となっており、旧中野村が設置者であることを示すものであろう（旧信夫郡中野村は S30.3 信夫郡飯坂町と合併、飯坂町は S39.1 福島市と合併）。将来の管理を考慮し、内務省敷地から割譲されたものと考えられる。他の記念碑は私有地。 R021105

数年前のことであるが、国立国会図書館の電子展示室「写真の中の明治・大正」コーナーの掲載資料リストの中に、いずれも福島県庁編纂になる『皇太子殿下行啓紀念帖』（以下『紀念帖』）・『福島縣寫眞帖』（以下『寫眞帖』）というものがあるのを偶然見つけ閲覧した。これは、大正天皇が皇太子時代（皇太子嘉仁親王、御称号明宮、以下嘉仁皇太子）に全国巡啓の一環として福島県へ行啓された時の記録集で、明治 41 年〔1908 年〕9 月 13 日～9 月 15 日まで福島市周辺を行啓されていたことが分かった。記念碑の設置月日の明治 41 年 9 月 12 日と符合することから、記念碑の設置は嘉仁皇太子（大正天皇）殿下の福島県行啓と何らかの関係があることが推定できた。

その後別件の整理に追われそのままにしていたけれども、今年（令和 2 年）のはじめに史料調査を再開、目星をつけていた「嘉仁皇太子殿下行啓」関連の文書がないか福島県歴史資料館の県庁文書を調べ直したところ、10 冊近い関連文書綴りがあることがわかり、その中に御駐輦記念碑は「東宮殿下（のちの大正天皇）行啓記念事業」として旧中野村が設置したという記載のある直接の史料を見つけることができた（国立国会図書館ウエブサイト/デジタルコレクションでも確認）。以下これらについて順次紹介していく。

〈旧中野村による記念碑設置 ――東宮殿下行啓記念事業―― 〉

旧中野村が御駐輦記念碑を設置することとなったのは、結論的にいうと嘉仁皇太子（のちの大正天皇）の福島行啓を契機とするものであるが、万世大路の開通の日（明治 14 年 10 月 3 日）に明治天皇が中野村を御通輦（御小憩）されたことを記念することを目的としたものである。後述するが嘉仁皇太子の福島行啓の一環として、明治天皇が御通輦された万世大路に使者を差し向け視察させている。

ところで、約 5 年の歳月をかけて福島県と山形県とが協同して建設を進めていた栗子新道（のち万世大路と命名）は明治 14 年（1881 年）10 月 3 日に完成、折から北海道・東北巡幸御還幸中（お帰り道）の明治天皇をお迎えし栗子隧道米沢側において開通式がおこなわれている。開通式では明治天皇よる栗子新道（栗子隧道）の通り初めがおこなわれ、当時の山形県令（知事）三島通庸が前導し天皇も徒歩で隧道に入られた。栗子隧道福島側坑口では福島県令山吉盛典が奉迎して福島へ向かわれた。途中旧信夫郡中野村村内の 3 箇所、すなわち**二ツ小屋隧道福島側坑口（二ツ小屋御小休所・福島県土木課出張所）、大滝胡桃平（大滝御小休所･中屋旅館渡辺要七方）、円部（円部御小休所･渡辺勇吉方）**、また旧信夫郡大笹生村管内 1 箇所、座頭町（大笹生村御小休所･菅野六郎兵衛方）の都合 4 箇所で御小憩をされている（『明治天皇紀第五』吉川弘文館など）。

このうち、旧中野村村内の 3 箇所に御駐輦記念碑が設置されているわけである。

（【写真 2-1～6】）（〔参考写真 1-1～5〕）　（【写真 1-1～4】参照）

【大滝御小休所】（現況）

【写真 2-1】
大滝御小休所記念碑。後光（朝日）射す。R010730
旧中屋旅館（渡辺要七宅）

【写真 2-2】
左側、御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」（明治 41 年 9 月 12 日設置）。
右側、昭和 10 年 11 月 2 日文部省史蹟指定記念碑（昭和 18 年 10 月設置） R021105

〔参考写真 1-2〕

北に新築した 8 畳二間が御小休所。 右上明治天皇御尊影(渡辺家提供)、この部屋に後年掲額(左上)。

【写真 2-3】

天皇陛下がお座りになった椅子 。H241118

〔参考写真 1-1〕
昭和 11 年頃の大滝御小休所。「明治天皇御巡幸録」(蔵書)から転載。

【円部御小休所】

【写真 2-4】
円部御小休所跡 (渡辺勇吉方)。H290428

【写真 2-5】
円部御駐駐輦碑(鳳駕駐蹕之蹟)。R021105

〔参考写真 1-3〕

円部御小休所 (渡辺勇吉方)。
(絵図説明書き)
(昭和七年)八月十一日午後二時写
明治十四年十月三日 御通輦
鳳駕駐蹕之蹟 明治四十一年九月十二日建設
中野村字円部 先戸主 渡邊勇吉
現戸主 吉三
長九尺五(約 106 cm)
巾九.五(29 cm)
堀江繁太郎筆
(福島県立福島中学校美術教師・郷土史家)。
福島県立図書館蔵
(「堀江画帖折本(御駐蹕之蹟 他)」)
【写真 2-4】と比較参照。

【大笹生村御小休所】(記念事業は実施されていない)

【写真 2-6】
大笹生村御小休所跡案内標柱(H22 年 7 月 31 日、
大笹生笹谷文化財保存会建之)。
フルーツライン(県道上名倉飯坂伊達線)座頭町交差点
西側　　H270429

〔参考写真 1-4 〕
大笹生村御小休所(大笹生坐頭町菅野六郎兵衛宅)
昭和 12 年(写真撮影)。
(昭和 10 年 11 月 2 日文部省史蹟指定)

〔参考写真 1-5 〕
大笹生村御小休所(菅野六郎兵衛方)、明治天皇御小憩の間(10 畳の書院造り床の間付)。
(絵図説明書き)
明治天皇の御小憩所(左側)。

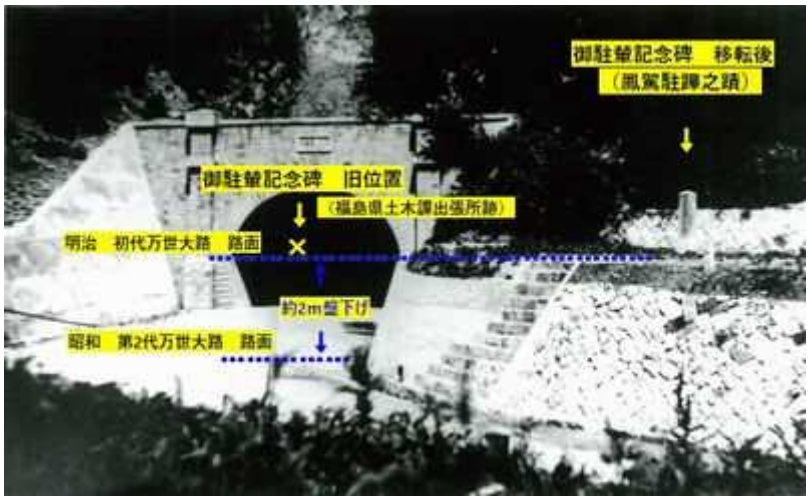
侍従の間(右側)に掲額、伊藤博文揮毫「粲霞」。

昭和 7 年　**堀江繁太郎**筆。
『明治九年明治十四年明治天皇御巡幸録』(150 頁)
第 52 図「大笹生御小休所玉座」にも使用。
福島県立図書館蔵
(「堀江画帖折本(御駐蹕之蹟　他)」)

〈二ツ小屋御駐輦記念碑の移設〉

なお、明治天皇が御小憩された福島県土木課出張所は、初代隧道の前にあり従って記念碑も当初は**二ツ小屋隧道**(※)前に設置されていた。**昭和の大改修**(※)においては自動車が通れる道路にするために、旧道を広げ線形を直し(まっすぐにし)、隧道も拡幅され 2mほど盤下げされるなどの改修がおこなわれることに伴い、記念碑は北側の現在位置に移設されている(『福島県直轄国道改修史』建設省福島工事事務所)。他の 2 箇所につては、ほぼ現在の位置に設置されていたものと思われる。**〔参考写真 2-1～3〕**。

(※) 二ツ小屋隧道・昭和の大改修については「巻末参考資料－１」を参照)。



〔参考写真 2-1〕
「昭和の大改修」により旧二ツ小屋隧道前にあった 記念碑が移転されている。
昭和 11 年 5 月(写真撮影)

〔参考写真 2-2 〕
昭和 9 年、御駐輦記念碑移転記念写真。
後列右から 3 番目が大滝葭沢在住の佐藤武雄氏、
当時内務省委託作業員賃金支払責任者（後大滝分校教員）。
その左、内務省福島国道改良事務所技手補菊地八郎氏（戦後福島工事事務所工務課長）。
前列中央は、同事務所技手高橋忠太郎氏（後二ツ小屋工場主任〔出張所長〕）、
その右同事務所技手補菊地佐一氏（戦後福島工事事務所松川砂防出張長）その他内務省職員。
右端子供は文字通りの子使いさん。

〔参考写真 2-3〕
旧隧道前に設置されていた**移転前の御駐輦記念碑**
（鳳駕駐蹕之蹟）。左背後は隧道か。
（絵図説明書き）
二ツ小屋御駐輦處　七月二十九日写
（『明治天皇御巡幸録』福島県教育会〔蔵書〕から転載）
堀江繁太郎筆

〈東宮殿下行啓記念事業と福島行啓について〉

これらの御駐輦記念碑は明治 41 年 9 月 12 日に設置されたものであるが、何の目的で誰がその日に設置したのか、長らく忘れられていて謎となっていたものである。このたび下記に紹介する史料により、「東宮殿下（のちの大正天皇）行啓記念事業」として旧中野村が設置したものであることが判明した。100 年以上も前のことになり、当時は誰でも知っていたはずであるが、年が経つうちにその伝承は失われてしまったようである。

前にも記しているが、大正天皇が皇太子時代において、全国巡啓の一環として福島県へ行啓され福島市周辺を明治 41 年〔1908 年〕9 月 13 日～9 月 15 日まで行啓された（福島県へは 9 月 8 日御来県）。その内 9 月 15 日には、嘉仁皇太子の父帝である明治天皇が明治 14 年〔1881 年〕10 月 3 日に御通輦された万世大路に御使者を遣わし視察させている（後述）。

この際に、嘉仁皇太子の福島県行啓を記念した記念事業をおこなうこととなったようである。この「東宮殿下行啓記念事業」はおそらく福島県の主導のもとで実施されたものと考えられるが、全県下 398 箇所で実施（福島県立図書館解説）されている。全体は詳細に把握していないが記念事業としては、植樹・学校の増築・図書館の設置・道路の開削等が実施されており、記念碑の設置というのは多分中野村だけだったようである。

以下にその記念事業の概要（中野村分のみ）とその契機となった嘉仁皇太子の福島行啓（万世大路への御使者派遣）の概要について記す。結論的にいうと旧信夫郡中野村におけるその東宮殿下行啓記念事業は、明治天皇が明治 14 年 10 月 3 日に万世大路を御通輦されたおりに御小憩された 3 箇所に記念碑を設置するというものあった。

(1) 旧中野村における嘉仁皇太子の福島行啓を記念する事業について

福島県において作成した冊子『東宮殿下行啓記念事業ノ概要』（明治四十一年九月八日発行）によれば旧中野村の記念事業の内容は次の通りである。

【東宮殿下行啓記念事業】（中野村分のみ掲載）

団　体　名　信夫郡中野村

事業の名称　記念碑建設

事業の概要　　明治 14 年 10 月 3 日、天皇陛下は東北御巡幸のお帰り途上に山形県米沢から新に開通した万世大路をお通りになり、栗子隧道の難所を越えて中野村の二ツ小屋隧道福島側坑口及び大滝（胡桃平）、円部の三ケ所で御小憩された。その御跡へ碑を建て永久に記念すべく殿下御着福前に竣工の予定で現在工事中である。碑は台石幅 2 尺/60 ㎝、碑石高さ 4 尺/1.2mである。**（注）**

（注）御駐輦記念碑には、「明治 41 年 9 月 12 日建設」と刻字されているが（二ツ小屋を除く）、これは次の日の 13 日日から福島市周辺の行啓が始まるので 12 日までに記念碑を設置する必要があったものと思われる（皇太子 12 日福島御着）。

（上記資料の原文は**巻末参考資料－2** に示した。上記現代語訳は筆者〔鹿摩〕による拙訳）

出典：冊子『東宮殿下行啓記念事業ノ概要』福嶋縣　明治四十一年九月八日発行）

史料出所：『明治四十一年八月　東宮殿下行啓記念事業調』綴、福島県歴史資料館蔵

国立国会図書館ウエブサイト／デジタルコレクション

【御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」諸元等】

設置されている記念碑の形状・碑文等は下記の通りである。

（寸法は実測したものであるがそれぞれ微妙に異なるので代表値で示した。）

材　　質　：石　材

形　　状　：台石幅約 60 ㎝　碑石高さ（台石上）約 110 ㎝、約 29 ㎝四方、頭部四角錐（高さ約 6 ㎝）。（各実測）

正 面 刻 字　：鳳駕駐蹕之蹟（字体〔二ツ小屋：楷書〕、〔円部：同〕、〔大滝：行書〕）

左・側面刻字：明治 14 年 10 月 3 日　御通輦　（二ツ小屋）

明治 41 年 9 月 12 日　建設　　（大滝、円部）

右・側面刻字：旧中野村中野吉平の和歌が刻字　（二ツ小屋）。

（御幸・萬世・石等断片的に分かるものもあるが全体判読不可であった。）

明治 14 年 10 月 3 日　御通輦　（大滝、円部）

背　　面　：刻字なし

（注）大笹生村御小休所には記念碑が設置されていない。筆者がかつて現地調査した折、御小休所案内標柱近くで畑作業をしていた男性に（大笹生村御小休所菅野六郎兵衛の親戚筋のようであった）、御駐輦記念碑について伺ったところ、かつて設置の動きがあったが実現しなかったという。

これについては、『明治 9 年明治 14 年明治天皇御巡幸録』（福島縣教育會　昭和 11 年 10 月 1 日）の中に「記念碑の建設に着手している」との記述があるが、結局実現しなかったと思われる（189 頁）。

参考【文部省史蹟指定記念碑について】

東宮殿下行啓記念事業とは別に大滝御小休所には「文部省史蹟指定記念碑」が下記の通り、御駐輦記念碑と並んで設置されているので参考までに諸元等を記す。　**（【写真 2-2】参照）**

材　　質　：御影石

形　　状　：碑石高さ（台石上）3m、30 ㎝四方　（『わが大滝の記録』による）

正 面 刻 字　：明治天皇大瀧御小休所

右・側面刻字：史蹟名勝天然紀念物保存法ニ依リ史蹟トシテ
昭和 10 年 11 月文部大臣指定

左・側面刻字：昭和 18 年 11 月　建設

背　　面　：刻字なし。

備 考

1）明治天皇聖蹟（行幸址・駐輦址・御野立所（おのだてしょ）、御小休所等）は、史蹟名勝天然紀念物保存法（大正 8 年 4 月 10 日制定）第 1 条により、国の文化財史蹟として昭和 8 年 11 月に第 1 次指定がおこなわれた。大滝御小休所は、第 3 次指定として昭和 10 年 11 月 2 日文部省令第 400 号により史蹟に指定された（『わが大滝の記録』PDF 版　38 頁　R02 年 11 月閲覧再確認）。この時、大笹生村御小休所も指定されている（二ツ小屋、円部は指定されていない。『栗子トンネル工事誌』〔1231 頁〕では円部も指定されたこととなっている）。指定には、建物が原位置によく保存されていることなど一定の基準を満たす必要がある。

なお、史蹟名勝天然紀念物保存法は現在廃止され、文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）に継承されている。

2）これら明治天皇聖蹟は、昭和 23 年 6 月 29 日文部省告示 64 号により、天皇制イデオロギーを支えるものとして、全国 377 件が一斉に文化財指定から解除されている。指定解除は、神道指令による政治的措置の一環としておこなわれたという。神道指令（昭和 20 年 12 月 15 日）は、国家主義的イデオロギーを鼓吹する神道（国家神道）を排除するという GHQ（連合国軍が日本占領中に設置した総司令部、連合国軍最高司令官〔マッカーサー〕総司令部）による措置である。

（以上は「東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史」北原糸子〔『国立歴史民俗博物館研究報告　第 121 集』平成 17 年〔2005 年）3 月 25 日〕により整理した。）

3）大滝御小休所（旧中屋旅館）のご当主によれば、戦後史蹟解除の通知が村からあり今後一切おかまいなしとなり、以後家屋石碑共に個人で維持管理してきたということである（通知文書は無くなった）。

ご当主弟さんによれば、昭和 18 年の記念碑設置の際は住民総出により実施したそうで、隣の倉庫にロープを懸け石碑を建てていたという。設置の主体とか、誰が費用を負担したかなどは分からないとのこと。

この時、御駐輦記念碑（鳳駕駐蹕之蹟）が若干移動されたという。それまで御駐輦記念碑は、柴木の柵に囲われていたそうである（大滝会談）

(2)皇太子殿下の福島御巡啓

嘉仁皇太子は、全国巡啓の一環として明治 41 年〔1908 年〕9 月 8 日、日光田母沢御用邸をご出発されお召し列車にて福島県へ行啓された。白河・猪苗代（有栖川宮威仁（ありすがわのみやたけひと）親王殿下御同伴）有栖川宮殿下別邸〔天鏡閣〕）・会津若松・二本松等をへて 9 月 12 日福島に到着され（福島旅館〔福嶋縣廳〕お泊まり）、翌日 13 日から福島市周辺（福島縣立福島蠶業（さんぎょう）学校〔現福島県立明正高等学校〕・福島中学校〔現福島高等学校〕・信夫公園・信夫文字摺・霊山等）を 9 月 15 日まで巡啓された。その内 9 月 15 日には、嘉仁皇太子の父帝である明治天皇が明治 14 年〔1881 年〕10 月 3 日に御通輦された万世大路に御使者を遣わし視察させている。嘉仁皇太子は、この日午前 8 時に旅館（福島県庁）を出発し、お召し列車で奥羽南線（現在の奥羽本線 **※注**）を福島から米沢に向かわれている。

なお、10 月 9 日・10 日には東北各地を巡啓されたあと岩沼からお召し列車で再び福島県にお入りになり浜通り（原町・富岡）を巡啓されてご帰京された。

（〔参考写真 3 -1～6〕）

〔参考写真 3 -1〕
皇太子嘉仁親王殿下（後の大正天皇）
『紀念帖』国立国会図書館ウェブサイト
（以下国会図書館）

〔参考写真３-2〕
有栖川宮威仁親王殿下御別邸
（猪苗代翁島天鏡閣）
『寫眞帖』 国会図書館

〔参考写真３-3〕
福島御旅館（福嶋縣廳）
『紀念帖』 国会図書館

〔参考写真３-4〕
福島縣立福島蠶業学校
（信夫郡渡利村、明治 29 年 9 月創立）
『寫眞帖』 国会図書館

〔参考写真３-5〕
霊 山
『紀念帖』 国会図書館

〔参考写真３-6〕
東宮殿下東北行啓記念「41.9 福島」（福島名所 信夫橋之景）
記念スタンプ （明治 41 年 9 月） 福島県立図書館蔵

（注） 奥羽線（現奥羽本線）

1）奥羽線（現奥羽本線）は、**明治 38 年（1905 年）9 月 14 日**に福島～青森間 L=484.5 ㎞全線が開通した（最後に残った湯沢～横手間この日開通）。平成 27 年（2015 年）9 月 14 日は開通 110 周年目にあたり各種イベントが実施されている。奥羽線の完成を早めるため、福島～湯沢間を奥羽南線として明治 27 年 2 月、湯沢～青森間を奥羽北線として明治 26 年 7 月、福島と青森の 2 箇所からそれぞれ工事に着手していた。

全線開通に先立ち、奥羽南線のうち**福島～米沢間 L=41.1ｋｍは明治 32 年（1899 年）5 月 15 日**に開通した。**（【写真 3-1～4】）**

2）嘉仁皇太子は、明治 41 年〔1908 年〕9 月 15 日に奥羽南線で福島から米沢へ向かわれているが、その 2 年後の明治 43 年〔1910 年〕8 月 11 日から 16 日にかけて福島地方では豪雨が続き各地で大水害が発生した（米沢でも大きな被害があったという）。松齢橋や岡部橋（現文知摺橋）が流失、濁流が福島市街地まで押し寄せるなど各地に甚大な被害をもたらした。

また、奥羽南線は庭坂赤岩間が不通となった（8 月 11 日）。

（明治 43 年 8 月 12 日、17 日付け福島民報/『福島市史資料叢書第 28 輯』昭和 49 年 8 月所収）

3）この奥羽線の不通は、赤岩駅の手前にある第 7 号隧道（L＝536.5m 第 1 赤岩隧道）の被災によるものであった。このトンネルは松川沿いの山腹に設置されたものであるが、集中豪雨により 200ｍにわたり地山に地辷りが発生してトンネルが変状し使用不能になったものである。地辷りということもあり、現状での修復は困難と判断され、トンネルは廃棄され松川南岸に線路が移設されることとなった。移設新線ルートが完成し再開通したのは 1 年後の明治 44 年 9 月 5 日であった。この間、第 6 号隧道（第 2 松川隧道）前後に仮乗降場が設置され、赤岩駅と間は急な山道の徒歩連絡で 40 分以上かかったという。

（『奥羽本線福島・米沢間概史』〔遠藤義朗 平成 13 年 1 月〕）。

これら破棄された旧線のトンネルは現在も残存していて見学することができる。

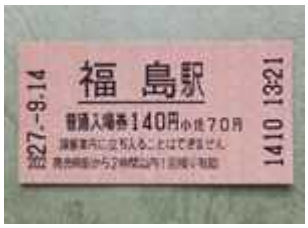
（【写真 4-1～11】【写真 5-1～3】）

【写真 3-1】
明治 38 年(1905 年)9 月 14 日
奥羽本線福島～青森間全線開通。

平成 27 年(2015 年)9 月 14 日は、開通 110 周年。
H27.9.14
(110 周年記念日撮影　於福島駅構内)

【写真 3-2】
福島～米沢間　明治 32 年(1899 年)
5 月 15 日開通。福島駅連絡通路にて
H270914

【写真 3-3】
奥羽本線起点(0(ｾﾞﾛ)ｷﾛﾎﾟｽﾄ)。
福島駅 5 番ﾎｰﾑ、米沢側を望む。
H271108



【写真 3-4】
平成 27 年 9 月 14 日(月)　福島駅
入場券　奥羽本線全線開通 110 周
年記念日。

【奥羽南線(当時)赤岩駅付近旧線残存遺構(明治 44 年 9 月新線切り替えにより廃棄)】

【写真 4-1】
第 7 号隧道(L＝536.5m、第 1 赤岩隧道)福島側坑口。
M30.1月完成。 M44.9 月廃止。
坑門左上隅に“7”(号)のトンネル番号が見える。
R021123

【写真 4-2】
第 7 号隧道崩落箇所(福島坑口から約 100m 付近)。
M43.8 月被災時でなく後年の崩落か。
(下部開口部〔横坑箇所付近)

【写真 4-3】
第 7 号隧道、坑内から
福島側坑口を望む。
このあたりではトンネルに
変状は見られない。
R021123

【写真 4-4】
第 7 号隧道明り巻部（地上部）。
福島側坑口（写真右側）から約 100m付近（歩測推定）。
左上開口部は明かり取りの窓か。
下部開口部（横坑 1～2m）は避難口か。
第 7 号隧道内へは、腹這いになりここから進入する。
R021123

【写真 4-5】
第 6 号隧道（L=110.6m、第 2 松川隧道）米沢側坑口。
M44.9 月廃止。　R021123

【写真 4-6】
第 6 号隧道。
アーチ部（天井）レンガ巻の状況。
しっかりしている。
R021123

【写真 4-8】
写真奥、第 5 号隧道（L=105.2m、第 1 松川隧道）。手前松川橋梁（L=64ｍ）、福島側橋脚。
R021123

【写真 4-7】
手前松川橋梁（M29 年完）。
（L=6.1〔煉瓦ｱｰﾁ〕＋45.7〔鋼ﾄﾗｽ桁〕＋6.1×2〔煉瓦ｱｰﾁ〕=64m）
写真奥、第 5 号隧道（L=105.2m、第 1 松川隧道）米沢側坑口。
米沢側（松川左岸）から福島側を望む。
M32（1899）.5 月開業　。M44（1911）.9 月廃止　。
R021123

【写真 4-9】
松川橋梁。
左･米沢側橋脚、右･米沢側橋台。
R021123

【赤岩駅付近現況】（R02.11.23）

【写真 5-1】
第 2 松川橋梁を行く山形新幹線（下り）

【写真 5-2】
旧赤岩駅
（スイッチバック）

【写真 5-3】
現在の赤岩駅。通年通過駅へ（平成 29 年 3 月 4 日〔土〕から）。
写真奥は駅西側のトンネル、左側、開業以来（M32.5）の第 8 号隧道（第 2 赤岩隧道 L= 80.5m、S45 改修、下り線）。
右側、大日向トンネル（L= 1025 m、複線化上り線 S43 完成）

(3)御使者の視察状況

嘉仁皇太子により万世大路に差し遣わされた御使者の視察状況は次の通りである（『皇太子殿下行啓紀念帖』より拙訳）。

○ 9 月 15 日の記（前文省略）

万世大路へご使者派遣

この日（筆者注 明治 41 年 9 月 15 日）、国道 39 号万世大路を視察させるために東宮武官秋澤芳馬を派遣された。午前 7 時半旅館を出発され、明治 14 年 10 月 3 日今上陛下（筆者注 現在の天皇陛下、ここでは明治天皇のこと）東北御巡幸の際に御休憩された大笹生村菅野六郎兵衛方に立ち寄られたのは午前 9 時頃であった。

このあと中野村堰場へ向われ、ここでは中野村村長（筆者注 近野元右衛門）、村会議員、多くの住民が出迎え御案内をして頂いた。御使者は、中野村円部・大滝胡桃平・二ツ小屋の 3 箇所において、今上陛下御駐輦（筆者注 天皇陛下の乗り物がお留まりになる）の御跡を視察された。

これらの視察後、御使者は米沢へ向かわれ午後 2 時、福島山形県境の栗子隧道に至り山形県係官のお出迎えを受けられた。山形県係官のご案内で、万世村を経由し米沢へ到着されている。**（注）**

（上記の原文は**巻末参考資料－3** に示した。上記現代語は筆者の拙訳による。）

出典：『皇太子殿下行啓紀念帖』（明治 43 年 4 月 5 日発行 福嶋縣廳内務部）
史料出所：国立国会図書館ウエブサイト／デジタルコレクション
参考：『福島縣寫眞帖』（明治 42 年 9 月 7 日　福嶋縣廳）
史料出所：国立国会図書館ウエブサイト／デジタルコレクション
（福島県立図書館デジタルライブラリー）

（注）

1）万世大路（国道 13 号、福島市～米沢市間）は、当初福島県側は「中野新道」、山形県側は「刈安新道」として建設工事が実施され、明治 14 年 10 月 3 日開通式の時点では両者併せて「栗子新道」と呼ばれた。開通式にのぞまれた明治天皇が御還幸後翌年明治 15 年〔1882 年〕2 月 8 日に「栗子新道」を「万世大路」とすることに決定し、翌 2 月 9 日に当時福島県令と山形県令を兼務していた三島通庸（当日は代理者出席）に下賜された（『明治天皇紀第五』等）。

明治 18 年〔1885 年〕2 月 24 日、万世大路は内務省告示により国道 39 号**（起点東京、終点米沢）**の一部となった。この時初めて国道に路線番号が導入された（この時の内務省土木局長は三島通庸）。因みに万世大路は、大正 9 年〔1920 年〕4 月 1 日に国道 5 号と名称が変更になり、戦後昭和 27 年〔1952 年〕12 月 4 日、国道 13 号**（起点福島、終点秋田）**と起終点と名称が変更され現在に至る。

2）東宮武官の旅館がどこか具体的に詳らかでないけれども、皇太子と同じとすれば福島旅館（福島県庁）であろう。万世大路視察時の交通手段も不明であるが馬車ではなかろうか（県庁から大笹生村菅野六郎兵衛方までは少なくとも 8 キロメートルはあり、徒歩ならば 2 時間以上はかかるであろう）。この際福島県係官も付き添ったと思われる。

万世大路の起点は、県庁近くの「福島県里程元標」で明治 8 年に設置されていて同じ頃福島郵便局が上町に移転してきており元標はその前に立っている。御使者はそれを確認し万世大路を米沢へ向ったであろう。

因みに、大正時代にできた道路法に基づき「福島市道路元標」が設置されることとなったが「里程元標」に替えて同一箇所に設置されている。

3) 御使者が立ち寄られた中野村村内の御駐輦跡には、真新しい「御駐輦記念碑」が 9 月 12 日に設置されていたであろう（この日のために設置）。二ツ小屋を除くと明治天皇が御休憩された家屋（部屋）が全て健在であったと思われる。（前掲写真参照）

なお、この御使者が大滝胡桃平に立ち寄られたということについては、大滝集落側には記録伝承がなく現在のご長老も誰も知らないということであった。したがって、「御駐輦記念碑」設置経緯も不明になっているわけである。

4) 山形県係官のお出迎えは栗子隧道の福島側坑口であったと思われる。米沢側の動向は把握していないが、山形県係官の案内で米沢市万世町桑山観音原（旧万世小学校跡）の駐輦之碑（明治 28 年設置）など各御駐輦箇所を視察されたものと考えられる。この日皇太子も米沢へご到着されているので合流されたのであろう。

5) 写真について

『紀念帖』(M43.4.5 発行）に掲載されている万世大路関連の写真は 3 枚でいずれも隧道の写真である。説明書きには隧道名等は記されていないが（万世大路とのみ記載）写真の状況から高平隧道（福島側）・二ツ小屋隧道（米沢側）・栗子隧道（福島側）と推定され、撮影時期は行啓のあった明治 41 年と考えられる。本稿の写真はこれを基本として関連の写真を掲載した。

なお、嘉仁皇太子の福島行啓の記録誌としては他に『寫眞帖』(M41.9.7 発行）があるが、こちらには万世大路関連の写真は掲載されていない。本書は、実際の行啓以前に発刊されたもので予定箇所の写真がおさめられているが、予定が変更となったか、実際には行啓されなかったところも掲載されており、逆に実際には行啓された箇所であっても写真のないところもあるという（福島県立図書館解説)。

以下御使者のあとを（想定を一部含む)、万世大路起点「福島縣里程元標」から終点「相生橋」（左岸）までを写真を用いて進行順に追うこととする。万世大路関連写真として『紀念帖』にあるものは 3 枚だけで、他は筆者手元の関係写真を添付した。

なお、栗子隧道**(「巻末参考資料－1」参照)**を含む山形県関係は史料を確認していないので、その一部（刈安隧道、駐輦之碑･万歳の松、相生橋）を想定して紹介するものである。栗子隧道の福島県側で山形県職員に引き継がれたのが午後 2 時というから、お立ち寄りが想定される万世大路の終点相生橋では日が暮れていたであろう。

(【写真 6-1～12-2】〔参考写真 4-1～11-3〕)

Ⅰ. 万世大路起点から大笹生村御小休所へ

【写真 6-1A】
万世大路起点：信夫郡福島町通十一丁目（現福島市上町）
「福島県里程元標」原設置位置（×印）
※〔参考写真 4-1〕参照
明治 8 年 11 月設置（想定）。

手前　整備された道路元標スポット。
- ･中央、復元された明治･福島県里程元標（木柱）。
- ･右隣り、移設された大正･福島市道路元標（石標）。
- ･左側交差点内（×印）、里程元標設置原位置表示プレート（R020221 埋設）

新大原綜合病院を望む（平成 30 年 1 月新築移転）。
右側福島県庁へ至る。　R020407

当該箇所は、福島城大手門の手前の奥州街道筋にあたり人の集まる場所･高札場（「札の辻」）のあったところである（元標設置箇所の条件でもある）。万世大路のご視察というからにはその起点の見学は欠かせないのではなかろうか。

【写真 6-1B】 《現況》
旧万世大路起点（福島県里程元標）から福島県庁を望む。
現在の県庁は昭和 29 年 9 月完成。
嘉仁皇太子の御泊まりになった旧県庁は明治 40 年 12 月に完成した洋風二階建の庁舎であった**〔参考写真 3 -3〕参照**。

原位置表示プレートの埋設位置が右隣り **〔参考写真 4-1〕**の白い標柱**「福島県里程元標」**のかつての設置位置である。

写真左側が新大原総合病院、その右の建物が福島警察署（旧信夫郡役所）でその手前は国道 13 号（現万世大路）「平和通り」である。 R020407

〔参考写真 4 -1〕 《明治時代》
旧万世大路起点（福島県里程元標）から福島県庁を望む。
赤矢印左側の白い標柱が**「福島県里程元標」**（御使者も御覧になったであろう）・原位置表示プレート埋設位置。
左側の建物は福島郵便局（昭和 54 年まで存続）。
（これは絵葉書〔写〕で元標スポット説明板に表示。
福島市役所配付資料より）

【写真 6-2A】
国民的作曲家古関裕而生家（喜多三呉服店）前の旧万世大路（旧奥州街道・旧国道 4 号・旧路面電車通り）現レンガ通り。
旧万世大路起点（上町）と旧 13 号起点（旧福ビル角、本町交差点）とのほぼ中間点。
本町交差点（旧福ビル角）、福島駅前（米沢側方面）を望む。
作詞家野村俊夫実家（魚屋「魚忠」）もすぐ近くで古関家斜向い万世大路沿い。（HP「うすゆき倶楽部」R0211 月閲覧）
前方右側、日銀福島支店（立木箇所）。 R020807

〔参考写真 4-2〕
昭和 8 年頃の旧万世大路スズラン通り・現パセオ通り（旧国道 5 号 13 号）を望む。本町交差点。
昭和 6 年我が国最初の国（内務省）直轄道路工事の一つとして、特殊なコンクリート舗装を実施、表面が石面（石たたみ）のように見えた。左側旧福ビル（現まちなか広場）。
（【写真 6-2B】とほぼ同一構図）

【写真 6-2B】
本町交差点（旧福ビル角）・実質的な万世大路起点（のち旧国道 13 号起点）。
米沢側を望む。
正面、旧スズラン通り・現パセオ通り（旧万世大路・旧国道 5 号）、
右旧万世大路起点方向（旧奥州街道・国道 4 号）、左福島駅。
R02080

【写真 6-3】
御使者の通られた万世大路。
フルーツライン（県道上名倉飯坂伊達線･座頭町交差点）付近から
福島市内へ直進する。
塩釜神社付近から望む。　　H290428

【写真 6-5】
御使者出迎え。
旧万世大路、旧中野村字堰場（堰板）地区。米沢側を望む。御使者を出迎えたのはこのあたりか。カーブミラーの箇所に中野村道路元標が設置されている。　H290428

【写真 6-4】
最初のお立ち寄り箇所、大笹生村御小休所菅野六郎兵衛宅屋敷跡（左側）全景。
【写真 2-6】参照。　　H290428

【写真 6-6】
円部御小休所にお立ち寄り。
左側、残存旧万世大路（旧国道 13 号）旧中野村円部地区。
御小休所（渡辺勇吉方）は写真奥。
右側、現国道 13 号。
右奥の山は沖根山山腹で高平隧道がある。米沢側を望む。
【写真 2-4】 参照。

Ⅱ. 高平隧道

〔参考写真 5 -1〕
初代高平隧道（L=140.3m、M13.2 月完成）福島側坑口。
御使者視察予定の明治 41 年頃の事前撮影か。
『紀念帖』より。 国会図書館

〔参考写真 5-2〕
昭和 5 年に改修された**第 2 代高平隧道**（コンクリート巻立、L=132.45m）。福島側坑口。　昭和 8 年頃。

〔参考写真 5-3〕
高平隧道図（第 2 代）
（絵図説明書き）
信夫郡中野村　字杉の平 高平隧道
長七十七間、東入口　（昭和七年）八月十一日午後二時廿分
堀江繁太郎筆。 福島県立図書館蔵
（堀江画帖折本〔御駐蹕之蹟 他〕）

【写真 6-7A】

【写真 6-7B】

旧高平隧道福島側付近の旧万世大路、この先で旧道は途切れる。
旧隧道坑口を彷彿とさせる場所。
砕石工場のための原石山となり旧高平隧道は消滅。
平成 24 年〔2012 年〕5 月現在。　（現況はさらに変化している。）

Ⅲ. 大滝集落

〔参考写真 6-1〕
昭和 7 年頃の信夫郡中野村大滝集落大滝地区。
米沢側を望む。
左下は大滝橋。

（絵図説明書き）
中野村大滝部落。

昭和 7 年 8 月 11 日（推定） **堀江繁太郎**筆。
『明治九年明治十四年明治天皇御巡幸録』（189 頁）
第 66 図「大滝部落の現在」にも使用。
福島県立図書館蔵
（「堀江画帖折本（御駐蹕之蹟 他）」）

〔参考写真 6 -2〕
大滝集落大滝地区、米沢側を望む。昭和 30 年代前半。
写真下が大滝橋。前掲〔参考写真 6 -1〕参照。

【写真 6-8】
大滝集落大滝地区の現況、手前旧大滝橋。赤岩道から米沢側を望む。
除染後。平成 28 年 4 月
〔参考写真 6-2〕とほぼ同一構図であるけれども、写真にある家屋は全て撤去されている。

〔参考写真 6 -3 〕
大滝･胡桃平　大滝御小休所にお立ち寄り。
昭和 45 年(1970 年)頃の**大滝地区長老沢･胡桃平地区**。
写真奥右側の瓦屋根が大滝御小休所。
右側手前茅葺きの建物が後掲【写真 6-9】の倒壊したトタン屋根の建物。
御使者の通った万世大路。
福島側から米沢側を望む。

【写真 6-9】
現在の大滝集落、**長老沢･胡桃平地区**。
右側の倒壊したトタン屋根の建物は、前掲〔参考写真 6 -3〕の右側茅葺きの建物である。
H280503

Ⅳ. 新沢橋付近～七曲坂

【写真 7-1 】
御使者の通った明治期初代万世大路。沢側に石積で拡幅されている。
新沢橋付近(左岸下流)、 昭和の大改修で廃止。
一部崩壊。
H250427

【写真 7-2】
御使者の通られた掘割。崩落した巨大岩盤の庇(巨冠ノ挺出)跡。
崩落土石に覆われた初代万世大路。
掘割付近から旧新沢橋 (初代)方面を望む。
H250427

【写真 7-3】
雪の万世大路。
森元源吾巡査殉職地付近通称「モリモト(地区)」(写真奥)を福島側から望む。
明治 21 年(1888 年)1 月 5 日遭難殉職。

このあたりは初代万世大路を補修した区間で明治の面影を残している。

御使者も巡査の逸話を聞いたであろう。
R020119

【写真 7-4】
明治初代万世大路七曲坂。左側 3 段段目道路、奥第 2 号カーブ、右下第 2 段目道路。
第 3 段目道路から望む。
R020404

【写真 7-5】
明治初代万世大路七曲坂。第 3 段目道路、第 3 カーブ跡付近から第 2 号カーブ 方面(福島側)を望む
R020404。

Ⅴ. 二ツ小屋隧道

〔参考写真 7 -1〕
御使者お立ち寄り。 初代二ツ小屋隧道福島側坑口。
栗子新道画図よりトリミング部分図（濱崎木麟画
明治 14 年 9 月）。 福島市資料展示室所蔵

左側の建物が**福島県土木課出張所（二ツ小屋御小休所）**ではなかろうか。実際はもう少し右側にあったと思われる（絵はデフォルメ化されているのであろう）。

福島側坑口付近の岩質はもろく亀裂が発達していたので、坑口は石材（切石）を用いて巻立し（壁や天井を作ること）半円状の洞門としたがまるで望遠鏡のようであったという（『萬世大路事業誌』福島県）。したがって坑口も切石を使用して保護したので、絵図のような坑門になったのであろう。この坑門の意匠は、昭和の大改修で改築された第 2 代隧道に引き継がれ、重厚美麗な坑門となったものと考えられる（二ツ小屋隧道だけ何故立派な坑門なのか作業仮説としての提案）。この坑門には、旧隧道で用いられていた切石が使用されている。

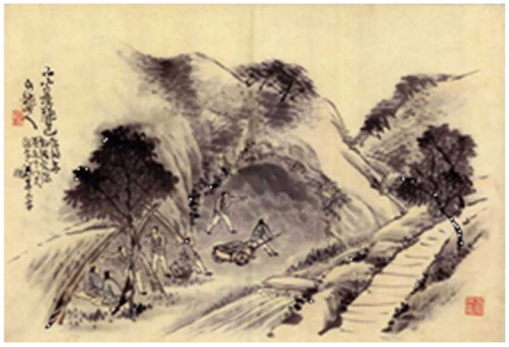
【写真 8-1】 二ツ小屋隧道福島側坑口、現況
重厚美麗な坑門。 小暮伸之氏提供 R020404

〔参考写真 7 -2〕
二ツ小屋隧道福島側坑口実測図。
昭和 8 年頃実測されたもの。『改修史』から転載。

〔参考写真 7 -3〕
初代二ツ小屋隧道米沢側坑口（推定）。
御使者視察予定の明治 41 年頃の事前撮影か。
『紀念帖』より。 国会図書館

福島側坑口付近と同様に米沢側の岩質ももろく亀裂が発達していたので石巻（いしまき、切石などでトンネルの天井や壁をつくること）を施工した。また門形の支柱（留木）を設置した（『萬世大路事業誌』福島県）。
後年（時期不明）、この手前にトンネルを 24m程延伸している（雪崩などの雪対策であったと思われる）。この 24mの明り巻き部分（トンネルの天井や側壁を地中でなく地上でつくること）にはレンガが使用された（レンガ巻、【写真 4-6】参照）。（『改修史』）

〔参考写真 7-4〕
昭和の大改修工事中（昭和 8 年）の二ツ小屋隧道 米沢側坑口。
手前のレンガ巻部 24m（明り巻部）撤去後の状況。
初代隧道当初の坑口部と思われる部分が出現している（前掲写真〔参考写真 7- 3〕参照）。左側手前にレンガ巻の一部と思われるものが見られる。



〔参考写真 7-5〕

二ツ小屋隧道米沢側坑口、工事中絵図。明治 14 年 7 月。

〔絵図説明書き〕

二ツ小屋隧道　在福島縣　洞穴深　百五十八尺　深字下脱一千二字　白龍山人。

「栗子隧道十二景『栗嶺奇観』」（菅原白龍画、明治 14 年 7 月（1881 年）より。　福島県立図書館蔵。

10 月 3 日の明治天皇の行幸に先立ち 9 月 2 日に内務省や侍従などの先発官が点検に訪れたけれども、二ツ小屋隧道は工事中で車（馬車等）が通れない状態であったという。落盤などがあって工事が遅れていたと思われる。（『山形県史資料篇二　明治初期　三島文書』山形県編　昭和 37 年 7 月）

【写真 8-2A】

雪に埋もれる第 2 代二ツ小屋隧道米沢側坑口（改修工事期間：昭和 8 年 5 月～昭和 9 年 12 月〔舗装完まで〕）。
昭和の大改修で延長 L=384mとなる。
（初代延長 L=353.6m→377.4mに延伸、時期不明）。
H290205

【写真 8-2B】

二ツ小屋隧道
米沢側坑口現況
R0211055

【写真 8-3 】

米沢側坑口の巨大氷柱（左側、トンネル天井から 5m以上）。

後にも先にも当該箇所の巨大氷柱はこの年だけ出現。
H230206（東日本大震災の一ヶ月前）

Ⅵ. 大平峠（旧大平集落）

〔参考写真 7 -6〕

大平峠・旧「難所七つ曲り」。 昭和 11 年 10 月改修工事終了後。
改修後も「八丁」と通称された難所。

大平峠（標高約 800m）は、二ツ小屋隧道（標高約 700m）と栗子隧道（標高約 900m）との間（約 5km）のほぼ中間点にある。この峠の福島側の初代万世大路は急坂、厳しい屈曲が続き大平峠「難所七つ曲り」と称された（『栗子トンネル工事誌』1245 頁）。御使者はこの道を上って行ったはずだ。
昭和の大改修の後（写真）も、長く続く上り坂は炭焼きに通う地元大滝のかた達にとっても辛かったようで、大平の「八丁」と通称された（胸突き八丁からきたものであろう）。

【写真 8-4 】
大平峠（標高約 800m） 福島側から米沢側を望む。昭和の大改修後。
H291105
初代明治期万世大路も同じところを越えたと考えられる。

峠を下ると間もなく旧大平集落に至る。

〔参考写真 7 -8 〕
昭和 9 年の大平集落跡。
中央は初代万世大路、福島側から米沢側を望む。
写真中央奥には貨物自動車、その後ろに旧大平橋らしきものが見られる。
昭和 7 年廃村となっていたが廃屋を補修し内務省の出張所、作業員宿舎等として借り上げていた。
昭和の大改修でこの上に 5m盛土され新道が建設された。

〔参考写真 7 -7 〕
大平集落のスケッチ画。
時期不明、人がいるので廃村（昭和 7 年）前であろう。中野小学校大平分教場（M31～M33）があった頃かも知れない
『中野小学校百年のあゆみ』（大滝会木村義吉前会長蔵書）より転載。（〔**参考写真 7 -8 **〕と同じ場所であろう。）

Ⅶ. 杭甲坂・栗子隧道（福島側）

【写真 9-1 】
杭甲坂第 2 段目道路（2 号～3 号カーブ間）。左側に数十メートル続く間知石積が見える。福島側から米沢側を望む。
H301103

栗子隧道付近から福島側へ約 1km杭甲橋付近まで、杭甲沢に沿って下る万世大路を杭甲坂と称している。勾配がきつく急カーブが続く難所である。昭和の大改修の際に抜本的な改築整備を計画したが地形的な制約などから初代万世大路の急カーブを大きくすること等にとどめ初代のルートをほぼ踏襲した線形になったという（『改修史』250 頁）。
したがって、当該区間も明治の面影を残していると考えられる。御使者の通られた道であろう。

【写真 9-2A】
杭甲沢三段滝（仮称）、杭甲坂第 1 号カーブから望む。
右下に石碑が見える。 H291105
御使者もしばし足をお留めになったであろう。

【写真 9-2B】
杭甲沢三段滝・滝壷石碑。
碑文 「（梵字）
栗子不動明王」昭和十一年十一月吉日之建」
H291105

昭和の大改修の時期にあたるが、
誰がどのような意図で設置したかは不明。

〔参考写真 8 -1〕

初代栗子隧道（L=876.3m、M14.9 月完成）福島側坑口。

御使者視察予定の明治 41 年頃の事前撮影か。
『紀念帖』より。 国会図書館 （トリミング、一部修正）

ここで御使者を山形県の係官に引き継いたと思われる。

前述の通り明治 32 年 5 月の奥羽南線福島・米沢間の開通により万世大路は衰退、御使者通過前の状況とはいえ、路面に落石が散乱している。

〔参考写真 8-2B〕
完成した栗子隧道（福島側坑口）。
髙橋由一画（明治 17 年 9 月 9 日写生旅行時、坑口旅館に宿泊）。
『山形県、福島県、栃木県 道路写生帖』（明治 18 年）より

（絵図説明書き）
南置賜郡万世新道ノ内福島県下
伊達郡栗子隧道東口ノ図
山形県立図書館蔵

〔参考写真 8 -2A〕
初代栗子隧道（福島側坑口）工事中。
菊地新学撮影。 「山形県写真帳」（明治 14 年）
〈南置賜郡栗子隧道東口〉 山形県立図書館蔵

【写真 10 -2】
迫力のトンネル内大崩落。昭和 47 年頃崩落（福島河川国道事務所パンフ）。次の崩落も時間の問題か。福島側から約 500m地点。矢内靖史様撮影提供
H280626

【写真 10 -1 】
第 2 代栗子隧道福島側坑口、現況。
左側、林の上は小杭甲（標高 1130m）。 H301103

〔参考写真 8 -3A〕
昭和 28 年_栗子隧道福島側積雪状況。

〔参考写真 8 -3B〕
（栗子隧道福島側から約 100m手前）
昭和 25 年_道路調査。右隣の石碑は「萬世大路改築記念碑」（「昭和の大改修（S8.4～S12.3）」竣功記念、昭和 12 年設置。碑文、田淵壽郎（たぶちじゅろう）第 10 代東北地方整備局長揮毫）。

Ⅷ. 栗子隧道（米沢側）・刈安隧道

〔参考写真 9 -1 〕
初代栗子隧道米沢側坑口。菊地新学撮影。
「山形県写真帳」（明治 14 年）
〈南置賜郡栗子隧道　西口〉
山形県立図書館蔵

写真中央下（奥）に坑口が見える。
建物は明治 14 年 10 月 3 日行幸の際の行在所と思われる。
菊地新学の「山形県写真帖」は、上記行幸の際に献上された（山形県立図書館解説）。

〔参考写真 9-2 〕
初代栗子隧道米沢側坑口。
中央手に帽子が山形県令三島通庸、一人おいて右側が御雇いオランダ人技師エッセル（万世大路工事を技術指導）。
明治 14 年開通前後と思われる。
（エッセルは帰国しており再来日したものであろうか。）
国立国会図書館

〔参考写真 9 -3〕
完成した初代栗子隧道（米沢側坑口）。高橋由一画（明治 17 年 9 月 9 日写生旅行時）。
『山形県、福島県、栃木県　道路写生帖』（明治 18 年）より
（絵図説明書き）
南置賜郡万世新道ノ内栗子隧道西口ノ図
山形県立図書館蔵

【写真 11 -1 】
第 2 代と初代栗子隧道米沢側、現況。
並んで佇む 2 代の栗子隧道。
右側初代:　明治 14 年（1881 年）9 月完成。
左側第 2 代:昭和 11 年（1936 年）8 月完成。
H251101

【写真 11 -2A】　H271014

【写真 11 -2B】　H210315 （おばら様撮影提供）

第 2 代栗子隧道米沢側坑口の現況、秋と冬。

【写真 11 -3A】　H271014

【写真 11 -3B】　H210315 （おばら様撮影提供）

初代栗子隧道米沢側坑口の現況、秋と冬。

【写真 11 -4 】
平成 21 年〔2009 年）初代栗子隧道米沢側現況。
坑内から坑外を望む。
H210315　おばら様撮影提供

〔参考写真 10 -1〕
明治 35 年〔1907 年〕、初代栗子隧道米沢側坑口、坑内から坑外を望む（下記引用書には「栗子峠」とのみ記載、場所は筆者の推定）。
『旅の家土産第四十二號』（奥羽の巻） 光村寫眞部　明治卅十五年三月。
国会図書館

【写真 11 -5】
初代栗子隧道（米沢側坑口）の**可憐な氷筍。**
H210315　おばら様撮影提供

〔参考写真 10 -2〕
明治 35 年〔1907 年〕、初代栗子隧道米沢側坑口。
（引用書には「栗子峠」とのみ記載、場所は筆者の推定）。『旅の家土産第四十二號』（奥羽の巻）光村寫眞部　明治卅十五年三月。　　国会図書館

【写真 11 -3B】を彷彿とさせる。

【写真 11 -6】
第 2 代栗子隧道米沢側坑口付近の巨大氷柱。
H210315　　おばら様撮影提供

【写真 11 -7】
第 2 代栗子隧道大崩落箇所、米沢側の状況。
H210315　　おばら様撮影提供

〔参考写真 10-3〕

明治期初代栗子隧道米沢側坑口

（S41.9.11 撮影、米沢市鈴木敬雄氏〔山形県資料より〕）。

左側石碑:「栗子隧道碑記」の碑　高さ 4m、幅 1.4m　下記参照。

右側石碑:「栗子神社」の碑

初代万世大路完成時に建立された総檜造りの栗子母智丘神社（仮称:くりこもちおじんじゃ、ご祭神受持神、大久保利通公・上杉鷹山公配祀）が腐朽したため昭和の大改修の際に「栗子神社」の碑として再建されたもの。

左側の**「栗子隧道碑記」の碑**は、明治 15 年 1 月、山形県令三島通庸により設置された。万世大路（栗子隧道）建設に至る経緯、工事の状況（貫通）、完成後の利用状況などと共に、明治 14 年 10 月 3 日明治天皇の行幸があり開通式がおこなわれた事などが刻されている。また、三島自身をも含め、工事責任者高木秀明土木課長（後福島県伊達郡長）、地元十大区長斎藤篤信（後山形師範学校校長）ら関係者を顕彰している。碑文は漢文で表裏 1718 文字。

なお、石碑の題字（篆額）は、行幸時の供奉員有栖川宮熾仁親王の揮毫による。碑文は、記録係伊藤十郎平の記録書を基に漢学者重野安繹が起草した（『三島文書』）。

御使者も石碑の前でしばし足を留められたであろう。明治天皇の行幸をえて、この前で栗子新道（のち万世大路）の開通式があり行在所があったことなどをお聞きになったと思われる。

〔参考写真 10 -4A〕

刈安隧道（福島側坑口）。菊地新学撮影。

「山形県写真帳」（明治 14 年）

〈南置賜郡刈安隧道　東口〉 山形県立図書館蔵

工期:明治 9 年 11 月～同 10 年〔1877 年〕2 月

諸元:L=36 間・65.5m、W=3 間・5.5m、H=2 間・3.6m

（『三島文書』）

【写真 11 -8A】

刈安隧道跡（現況掘割）を福島側から望む。

H241006

昭和 38 年頃、当該箇所を通過した時先輩に隧道跡だと教えられたことが記憶に残っている。

大正 12 年（1923 年）7 月 26 日崩落、掘割となる。

（『萬世郷土史』）

福島側坑口には、当時開鑿掛詰所があり明治天皇が御小憩された。
御使者もこの隧道を視察され御小憩跡を確認されたかも知れない。

〔参考写真 10 -4B〕

刈安隧道（米沢側坑口）。菊地新学撮影。

〈南置賜郡刈安隧道　西口〉 山形県立図書館蔵

「山形県写真帳」（明治 14 年）

【写真 11 -8B】

刈安隧道跡（現況掘割）を米沢側から望む。

H241006

Ⅸ. 観音原御野立所跡（駐輦之碑）・相生橋（万世大路終点）

〔参考写真 11-1A〕
「観音原御野立所跡」（現　米沢市万世町桑山観音原）

駐輦之碑図
（絵図説明書き〔関連部分〕）
駐輦之碑
東久世　伯　題額　　（従二位勲一等伯爵　東久世通禧
篆額「駐輦之碑」揮毫）
秋月種樹撰　　（従三位勲三等秋月種樹　碑文）
岩谷　修書　　（正 4 位）

拓本をとる　　萬世尋常小学校ゝ庭
仝村長中嶋利硯氏の助力を得たる事
（昭和七年）八月二日　写
堀江繁太郎筆。　福島県立図書館蔵
（堀江画帖折本〔御駐蹕之蹟　他〕）

【写真 12 -1B】
「駐輦之碑」 題字・題額（篆額）
揮毫　東久世通禧伯爵

【写真 12 -1A】
明治 14 年 10 月 3 日、明治天皇御小憩所（観音原御野立所跡）。
駐輦之碑（明治 28 年建立）と万歳の松（明治 22 年植樹）。
米沢市万世町桑山観音原（旧万世小学校跡）　　H241006

「観音原御野立所跡」
明治 28 年 4 月石碑を設置、御駐輦の記念とし、併せて記念の松を植えて「万歳の松」と称した（案内板によれば松の植樹は明治 22 年、万世村新設時）。碑文は、明治天皇がこの地に御駐輦されたこと、万世村の村名が万世大路から採られたこと、三島通庸県令の顕彰などが刻されている。又裏面には東久世通禧（※）の和歌が刻されている。
和歌　万歳之松　通禧
いでましを　あふぎて　今も　松が枝に　萬世唱ふ　かぜの音かな
（※）従二位勲一等伯爵、貴族院副議長等　東久世通禧
篆額「駐輦之碑」揮毫
明治 14 年 10 月 3 日、明治天皇は当時の桑山村（のち明治 22 年 7 月 5 ヶ村が合併し万世村）観音原にて御小憩された。万世小学校が後年この観音原に移転してきて御小憩跡は校庭の一部となっていた。

万世尋常高等小学校の校歌（二番）
「いにし明治の一四年　一〇月三日の駐輦を　仰ぎ　まつりし　み跡にて」
（『萬世郷土史』より）

【参考写真 11 -1B】
東久世通禧伯爵
国会図書館

〔参考写真 11-2〕

初代万世大路終点・相生橋左岸　米沢側。
（明治：南置賜郡米沢今町）。
左側の三角形山は栗子山（地元）。
髙橋由一画（明治 17 年 9 月 9 日写生旅行時）。
『山形県、福島県、栃木県　道路写生帖』（明治 18 年）より。
（絵図説明書き）
南置賜郡万世新道ノ内相生橋ノ図　　山形県立図書館蔵

【写真 12 -2】

初代万世大路終点・相生橋左岸　米沢側、現況。
（現在：米沢市相生町）。　最上川（松川）。
中央の三角形山は栗子山（地元）。　　H251101

〔参考写真 11-3〕
相生橋。菊地新学撮影。
「山形県写真帳」（明治 14 年）
〈南置賜郡相生橋〉
山形県立図書館蔵

諸元：　L=90.9m（50 間）　W=7.3m（4 間）
工期：明治 10 年 3 月～9 月　　工費：3,313 円
（『三島文書』）

おわりに

この度は、明治神宮・国際神道文化研究所主任研究員打越孝明様には明治天皇聖蹟の調査研究の一環として、福島県側万世大路をご視察され二ツ小屋御駐輦記念碑の和歌の解読を試みて頂き感謝申し上げます。打越様には、現在までの調査研究の成果として明治神宮鎮座 100 年記念出版『明治天皇の聖蹟を歩く【西日本編】』（〔株〕KADOKAWA、2018 年 11 月）を出版されておられます。今回の調査成果を踏まえて【東日本編】を出版される予定とのこと楽しみにしております。

さて今回の報告では、予てから謎であった御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」設置の経緯についても和歌の解読報告と共に発表しました。そして、その記念碑設置の契機となった皇太子（嘉仁親王、後の大正天皇）の明治末の福島県行啓について若干触れながら、御使者による万世大路の視察状況について、当時の写真と現況の写真を比較し想像を加えながら紹介してみました。現況写真については、山友おばら氏をはじめ大滝会や関係者の皆様に提供して頂き感謝申し上げます。また、大滝会ＨＰの編集アップについて管理人紺野文英さんにお世話になり感謝申し上げます。

今回の報告について一部不明点などもあり皆様からの情報提供をお持ち申し上げますと共に遺漏や誤謬などお気付きの点があればご一報頂きたくお願いいたします。

資　料　編

巻末参考資料－１

【二ツ小屋隧道の概要】

【栗子隧道の概要】

「栗子隧道の名称について」

【昭和の大改修】

「昭和の大改修の事業効果」

巻末参考資料－2

○『東宮殿下行啓記念事業ノ概要』抜粋

巻末参考資料－3

○『皇太子殿下行啓紀念帖』抜粋

別添参考図

○万世大路変遷概要図

巻末参考資料－１

【二ツ小屋隧道の概要】

●第２代二ツ小屋隧道について

第２代二ツ小屋隧道の概要は次の通りである。

(1) 二ツ小屋隧道は、旧国道 13 号のトンネルで福島市飯坂町中野二ツ小屋地区に所在する。
（二ツ小屋山標高 947.3m（四等三角点）に穿たれた。トンネル標高：両坑口約 694.4m）

(2) トンネル諸元等

構造：コンクリート巻立（壁や天井がコンクリート造）、セメントコンクリート舗装

延長：L=384m（既設隧道 6.4m延伸）、車道幅員 W=6.0（全幅 6.5m）、

高さ：全高 H=5.1m（建築限界 4.5m）

トンネル縦断勾配：ほぼ水平（両坑口から上り 1%の拝み勾配。中央クラウン。）

横断勾配：　　1:40（2.5%）

掘削時地質：新第 3 紀層の安山岩・玄武岩（覆工崩壊箇所柱状節理露出）・凝灰岩（湧水多し）

(3) 工事期間等

工事期間：昭和８年５月～昭和９年 12 月（舗装完まで、本体３月完成）　１年７ヶ月間

供用開始（一般車の通行開始）：昭和 12 年（1937 年）５月

（昭和 41 年（1966 年）５月栗子国道（栗子ハイウエイ）開通まで 30 年間使用）

(4) 工事費　　約 122,700 円

(5) 本トンネルは、明治時代に建設された初代二ツ小屋隧道（荷牛馬車対応）を改修（拡幅）して自動車も通行出来るようにした２代目二ツ小屋隧道である**(参考図参照)**。

●初代二ツ小屋隧道について

初代二ツ小屋隧道の概要は次の通りである。

(1) トンネル諸元等

延長:L=194.5 間（353.6m）昭和の大改修時点（S8.5）L=377.4m（改修延伸、時期不明）。

初代の延長 194.5 間/353.6mに対し、明治 41 年以降に（初代当初の坑口と思われる明治 41 年９月の写真がある）米沢側が 24m延伸され、隧道延長が 377.4mとなっている（昭和８年５月「昭和の大改修」時点の確認）。この延伸された 24m分はレンガ巻で（隧道の天井や壁がレンガ造り）、「昭和の大改修」時の横断図を見ると隧道の上の地表が水平になっており埋め戻されたものと推定され、当該区間が明り巻施工（トンネル本体〔天井や壁〕が地中でなく地上で築造）であったものと考えられる。因みに「昭和の大改修」において、さらに 6.6m延伸され、現隧道の延長 384mとなった。

幅員:W=3 間（5.45m〔路面 4.5m推定〕）　　昭和の大改修時点（S8.5）　W=3.0m内外

高さ:H=2 間（3.6m）　　昭和の大改修時点（S8.5）　H=2.3m内外

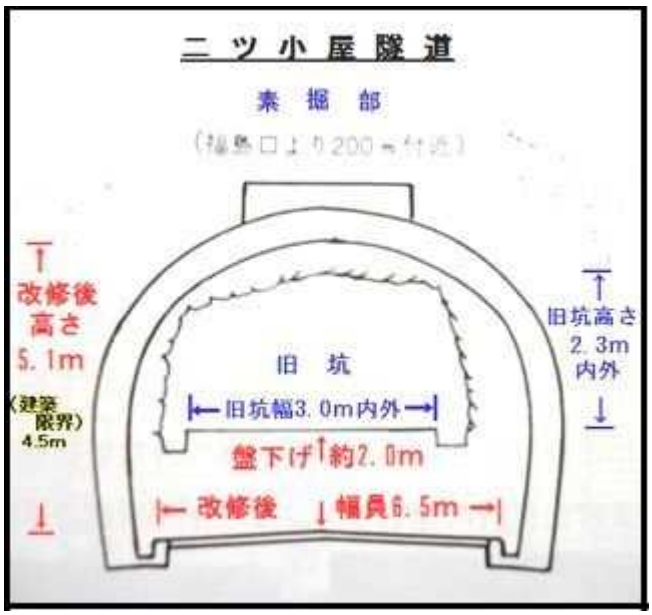
（改修時幅員、高さは『福島県直轄国道改修史』（実測図）からの推計）

(2) 工事期間等

工事期間等:明治 10 年（1877 年）10 月～明治 14 年（1881 年）９月（４年間）

【二ツ小屋隧道関連写真】

〈写真No.1〉
二ツ小屋隧道福島側坑口・工事中、昭和 8 年〔1933 年〕。大引（おおびき：中央横に設置されている大きな丸太）の位置が、ほぼ旧隧道の路面の高さになる。したがってそれから下は約 2m 盤下げされている。



【参考図】 昭和の大改修では、旧隧道の断面を切り拡げた。
（栗子隧道もほぼ同じ）

〈写真No.2〉
完成した二ツ小屋隧道福島側坑門。
重厚美麗、万世大路随一の景観誇る。昭和 9 年完

〈写真No.3〉
第 2 代二ツ小屋隧道銘板・福島側坑口**「二ツ小屋隧道昭和九年三月竣功」**東北地方整備局第 8 代坂本丹治局長（T13.3.25～S9.5.11，在任期間 10 年 2 ヶ月。当時内務省仙台土木出張長）揮毫。
米沢側も同じ。

〈写真No.4〉
二ツ小屋隧道　福島側坑口現況　R021105

〈写真No.5〉
二ツ小屋隧道　米沢側坑口現況　R021105

※　参考【二ツ小屋】の読みについて

・地元（旧大滝集落）　　ふたつごや　　（濁る）
・文献　　ふたつこや　　（濁らない）

1）福島市史編纂委員会『福島市史資料叢書第 38 輯福島の小字』福島市教育委員会
昭和 58 年 3 月 31 日
2）「点の記　三等三角点　二ツ小屋山」（国土地理院）
濁らない「ふたつこややま」のルビあり。

【栗子隧道の概要】

●第 2 代栗子屋隧道について

第 2 代栗子隧道の概要は次の通りである。

(1) 栗子隧道は、旧国道 13 号の福島県と山形県の県境に位置するトンネルで、福島市飯坂町中野～米沢市万世町刈安に所在する。旧杭甲嶽の大杭甲（標高 1202m、地元の方々が栗子山と呼んでいる）と小杭甲（標高 1130m）の鞍部の中腹に建設されたトンネルである。標高は、福島側坑口：885.4m、米沢側坑口：876.5mで、最高点は 888.3m（福島側から 400m地点）。昭和 41 年（1966 年）5 月 29 日新国道開通に伴い廃道となっていて、昭和 47 年頃のトンネル内部の崩落により不通となっている（福島工事事務所パンフレット）。

(2) トンネル諸元等

構造：コンクリート巻立（壁や天井がコンクリート造）、セメントコンクリート舗装

延長：L=870m、車道幅員 W=6.0（全幅 6.5m）、高さ全高 H=5.1m（有効高 4.5m）

トンネル縦断勾配：拝み勾配　福島側、＋0.714％（400m）、山形県側、－2.5％（470m）。
横断勾配　1:40（2.5％）

県別延長　L=870m　福島県分 L=453m　山形県分 L=417m

地　質：栗子隧道については地質関係の情報が得られていない。栗子峠は、所謂栗子層と呼ばれる新第三紀中新世（約 2,400～500 万年前）の地層で覆われている。筆者等が栗子隧道崩落箇所で観察した土石は、素人判断では栗子層を構成する流紋岩乃至は凝灰岩や砂岩のように見えたので参考までに記しておく。

(3) 工事期間等

工事期間：　昭和 9 年 5 月～昭和 11 年 8 月（舗装完まで、本体 2 月完成）　2 年 4 ヶ月間。

・栗子隧道のトンネル銘板によれば昭和 10 年 3 月竣功と記載されている。工事記録（『福島県直轄国道改修史』224 頁）によれば巻立完成（トンネル本体の完成）は昭和 11 年 2 月 15 日となっている。
また、福島側と米沢側の 2 箇所の坑門は、昭和 9 年 8 月に着工し 11 月に竣功している。坑門竣功写真を見るとトンネル銘板が既に設置されており、昭和 9 年度末になる昭和 10 年 3 月を敢えて竣功年月としたことと関係があるのかも知れない。

供用開始（一般車の通行開始）：昭和 12 年（1937 年）5 月
（昭和 41 年（1966 年）5 月栗子国道（栗子ハイウエイ）開通まで 30 年間使用）

(4) 工事費　　約 218,000 円　（福島県分約 108,000 円、山形県分約 110,000 円）

(5) 本トンネルは、明治時代に建設された初代栗子隧道（荷牛馬車対応）を改修（拡幅）して自動車も通行出来るようにした 2 代目栗子隧道である**(参考図参照)**。

●初代栗子隧道について

初代栗子隧道の概要は次の通りである。

(1) トンネル諸元等

延長:L=482 間（8 町 2 間）（876.3m）

幅員:W=3 間（5.45m〔路面 4.5m推定〕）　昭和の大改修時点（S9.5）　W=3.0m内外

高さ:H=2 間（3.6m）　昭和の大改修時点（S9.5）　H=3.3m内外

（改修時幅員、高さは『福島県直轄国道改修史』（実測図）からの推計）

(2) 工事期間等

工事期間等:明治 9 年（1876 年）12 月～明治 14 年（1881 年）9 月（4 年 10 ヶ月）

明治 11 年 5 月　福島県側からも掘削開始

供用開始　明治 14 年 10 月 3 日　（昭和の大改修（S8.4～S12.3）まで 55 年間使用）

(3) 工事費　・工事費　約 126,000 円（国庫補助約 31,900 円）

(4) その他

貫通：明治 13 年（1880 年）10 月 19 日

・貫通点：福島側から 403.6m、貫通部分 2.7m、米沢側から 470m　L＝876.3m)。

・貫通に立ち会った三島通庸山形県令の和歌

「ぬけたりとよふ一声に夢さめて　通ふもうれし穴の初風」

「突貫し錐（きり）と錐とのゆき逢は　むすひの神の恵なるらむ」

「民のためつくす心は陸奥（みちのく）の　山の穴隧（あなみち）ふみてこそしれ」

（本項『三島文書』による。三首目は原文全部ひらがななので拙訳を示す。）

（『福島県直轄国道改修史』より）

※『三島文書』:山形県編『山形県史資料篇二　明治初期下　三島文書昭和 37 年 7 月 10 日。

【栗子隧道関連写真】

〈写真No.1〉
栗子隧道福島側坑内施工中、昭和 9 年。
奥の坑口は初代隧道。

〈写真No.2〉
栗子隧道福島側坑口施工中、昭和 9 年。
大引（おおびき：中央横に設置されている大きな丸太）の位置が、ほぼ旧隧道の路面の高さになる。従って、それから下は約 2m 盤下げされている。

〈写真No.3〉
初代栗子隧道内、昭和 9 年（1934 年）。昭和の大改修、拡幅工事中。初代栗子隧道は、明治 14 年（1881 年）9 月に完成していたが、明治 32 年（11899 年）5 月の奥羽南線福島米沢開通後は通行者が激減し衰退していた。また、経年変化によりトンネル断面が縮小している（参考図等前記参照）。御使者が通行された時（M41.9）も、写真に近い状態であった可能性もあるだろう。

〈写真No.4〉
第2代栗子隧道福島側坑口
（S41.9.11 撮影、米沢市鈴木敬雄氏
山形県資料より）

〈写真№5〉
初代栗子隧道米沢側抗口 昭和 9 年。 昭和の大改修施工中。
初代栗子隧道は、米沢側の坑口から約 60mが 23 度折れ曲がり「くの字」になっている。昭和の大改修ではここを直線としたため、新しい坑口が約 25m北側にでき、旧隧道の 60m分が残存し、昭和と明治の坑口が併存する極めて珍しい光景となっている。(『福島県直轄国道改修史』)
初代隧道が何故折れ曲がっているのか、諸説あるものの坑口位置を誤って施工したというのが真相のようである。
(小形利彦『来形一四〇年 山形初代県令三島通庸とその周辺』2013 年(平成 25 年)4 月 5 日)

〈写真№6〉
第 2 代栗子隧道米沢口施工中。 昭和 9 年。
坑口が折れ曲がっていた旧隧道を直線としたため約 25m北側に新しい坑口が施工されている(新設箇所約 55m)。

〈写真№7〉
栗子隧道米沢側坑口 昭和 41 年頃。
約 25m間隔で並列、2 代の栗子隧道。

〈写真№8〉
今では考えられない天下の 1 級国道 13 号(当時)の栗子隧道坑口(山形県側)記念写真。
昭和 31 年 8 月 19 日、中野村青年団。
左側に《福島県》の案内板が見える。
【参考資料】
・交通量 昭和 35 年度 166 台/日
(昭和 32 年度 52 台/日)
(『栗子トンネル工事誌』)
・現在交通量
東北中央自動車道(福島米沢) 10,100 台/日
国道 13 号(万世大路) 2,300
合計 12,400
〔中央道開通前 国道 13 号 8,000 台/日〕
(国土交通省福島河川国道事務所
記者発表資料 H30.1.30)

〈写真№9〉
第 2 代と初代栗子隧道米沢側、現況。
並んで佇む 2 代の栗子隧道。
右側初代: 明治 14 年(1881 年)9 月完成。
左側第 2 代:昭和 11 年(1936 年)8 月完成。
H271014

「栗子隧道の名称について」

これはまさにどうでも良いことで取り立てて話題にすることでもないが念のために記しておきたい。

明治期に建設された栗子隧道の名称を栗子山隧道と表記する向きがあるけれどもこれは明らかに間違いであろう。かつて初代栗子隧道の米沢側坑口に設置されていた「栗子隧道碑記」の碑文題字（篆額、明治 14 年 10 月 3 日行幸時の供奉員有栖川宮熾仁親王揮毫**〈写真No.1、No.2、No.3〉**）は勿論のこと、三島文書を見ても分かるように、このトンネルの名称については**「栗子隧道」**と明確に表示されておりそれ以外の何物でもなく全く議論の余地はない。そのトンネルの真ん前に、まさに銘板代わりとも云える石碑にその名称が「栗子隧道」とはっきり書いてあるのになぜ栗子山隧道になってしまうのか不思議である。

〈写真No.1〉

篆額:栗子隧道碑記

栗子山隧道と云われるようになったのは、おそらくこの「栗子隧道碑記」碑文の基となった三島通庸山形県令の記録係山形県九等属（県職員）伊藤十郎平の著した『栗子山隧道工事始末記』に由来するものと考えられる（当時栗子山隧道とも通称されていたのであろう、当該文書本文等の中にも「栗子山隧道」が使われている）。しかし、その工事関連記述の基礎資料として用いられている栗子隧道工事の当事者とも云える責任者高木秀明土木課長の著した「栗子新道工事始末記」の中ではすべて「栗子隧道」となっているし、何よりも当の伊藤自身の著した続編「栗子新道工事始末第 2 回記」の中ではほとんど「栗子隧道」が使用されている（『三島文書』参照）。そのほか『明治天皇紀』の中でも「栗子隧道」が用いられている。

明治期に完成したこのトンネルは、完成したその時点から勿論現在までその名前は一貫して「栗子隧道」であって「栗子山隧道」と名乗った事は一瞬たりとてないのである。まして、第 2 代栗子隧道について、初代栗子山隧道の名称を変更して「栗子隧道」としたというに及んでは何をか言わんやである。

（なお、土木学会選奨土木遺産認定応募時においては、煩雑さを避けると云うことで、テクニカルターム的な使用方法として明治期の隧道を「栗子山隧道」、昭和期の隧道を「栗子隧道」と区別して表現したと聞いている。）

〈写真No.2〉

有栖川宮熾仁親王殿下銅像（港区有栖川宮記念公園）　H271110

（陸軍大将兼左大臣二品大勲位、元倒幕軍「東征大総督」）

熾仁親王は、徳川 14 代将軍家茂に嫁した（文久 2 年（1862 年）和宮降嫁）

孝明天皇の妹宮和宮の元許嫁としても知られる。

〈写真No.3 〉

「栗子隧道碑記」の碑

（明治 15 年 1 月、初代栗子隧道米沢側坑口に設置）

漢文刻字 1718 文字（表裏）。

高さ 400 ㎝、幅 140 ㎝、厚さ下端 37 ㎝ 上端 14 ㎝（歴史の道土木遺産万世大路保存会資料）

国土交通省栗子国道出張所構内所在時撮影。 H270429

（現在、道の駅「米沢」構内所在）

【昭和の大改修】

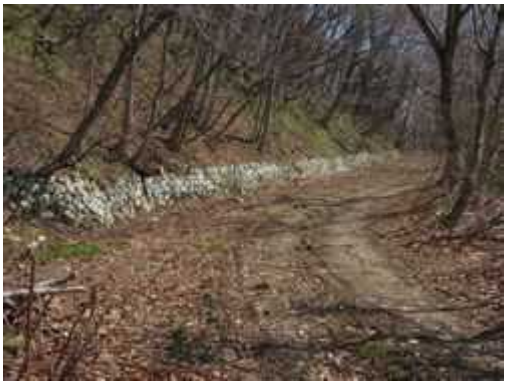
「昭和の大改修」とは、明治時代に開通した（M14（1881）.10.3）初代万世大路をそれまでの荷馬車通行から自動車も通行できるように改修した事業を指す。本工事は、当時の内務省仙台土木出張所福島国道改良事務所（現国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所）において直営工事として施工された。工事期間は昭和 8 年（1933 年）4 月から同 12 年 3 月までの 4 箇年、総事業費 678 千円である。その「昭和の大改修」という事業名称は、実は当時の正式名称でもなければ、また通称としても用いられたという事実はなく、筆者らが最近になって便宜的に使用しているものである（いわば業界用語でテクニカルタームの一種とでも云えよう）。

『福島県直轄国道改修史』（建設省福島工事事務所、以下『改修史』）によれば、本事業については一貫して「5 号国道改良工事」と称している。また、当時の内務省においても「直轄国道改良工事」（路線名 5（号））と表現している（『道路の改良』第 18 巻 6 号、昭和 11 年 6 月、遠藤貞一）。或いは事業名として「国道改良事業」（5 号国道栗子峠（福島県、山形県界））となっている（『道路の改良』第 18 巻 9 号、昭和 11 年 9 月、遠藤貞一）。従って、当時の正式事業名は「5 号国道改良工事」であったと考えられる。

なお、今回の国（内務省）の事業延長は、万世大路全体延長の約 48ｋｍの内の山岳部の約 14ｋｍ分である。その前後については、文書等資料では確認できていないが、橋梁やトンネル等について自動車通行に適合するように、福島･山形両県において国に呼応する形で改修工事が実施されたのではないかと推察している。

〈写真No.1〉
「昭和の大改修」（S8.4～S12.3）二ッ小屋隧道福島側七曲ﾊﾞｲﾊﾟｽ箇所（仮称）、掘割箇所（通称カエル岩）施工中。最初のﾍｱﾋﾟﾝｶｰﾌﾞ全景。昭和 9 年。

以下大雑把な推計値を示せば次の通り。
二ツ小屋隧道と現在の連絡道路（旧工事用道路）入口とは約 70m の高低差があり、明治の初代万世大路は、この間約 0.8kmを九十九折り（七曲坂）で下っていた（約 9%）。
昭和の大改修では、この九十九折り区間を 2 箇所のヘアピンカーブを含むバイパス約 1.3kmで下るよう改修したものである（約 5%）。



〈写真No.2〉
二ツ小屋隧道福島側の七曲バイパス（仮称）、ヘアピンカーブの上下カーブの中間点の間知石積工を望む。 R020404
前掲 〈参考写真No.1〉参照。

「昭和の大改修の事業効果」

改修後、昭和期第 2 代万世大路は、明治のそれに比べ延長が約 1km 長くなったということであるが、時間としては福島米沢間鉄道（所要時間 2 時間 36 分※）よりも、自動車交通の万世大路の方が 30 分早くなったという（『改修史』242 頁）。旧万世大路は福島米沢間を荷馬車で往復 3 日要したが、昭和の大改修時点では隧道などの損傷が酷く通行は困難な状態であったという。

この道路は改良工事を実施した結果自動車交通に適応したものとなり、福島米沢間には戦後は定期バスも運行されるほどであったが冬期 5 ヶ月間は通行止めであった**〈写真№3〉**。現国道 13 号栗子国道（通年通行確保）が供用開始される昭和 41 年（1966 年）5 月まで約 30 年に亘り使用された。

〈写真№3〉

当時、大滝集落・人家最西端旧宮内屋旅館前（高野家）付近の旧国道 13 号（万世大路）。

旧国道 13 号は、冬期間このあたりで通行止め（12 月～4 月）になったという。

昭和 40 年代前半。

ところで、5 号国道改良工事（昭和の大改修）は、本来の道路事業目的のために計画的に実施されたものではなく、失業対策という社会政策的な目的で実施されたものであった。勿論、自動車交通に適合した幹線道路の整備は、経済社会の発展、自動車保有台数の増加からみて当然必要なものでその整備計画も存在した。失業対策は「単なる方便」（『道路の改良』）として、結果的に道路整備が図られることとなったものである。

髙橋是清大蔵大臣**〈写真№4〉**による（高橋財政）失業対策事業時局匡救事業（「5 号国道〔万世大路〕改良工事〔昭和の大改修〕もその一環）は、初期の目的である国民の生活安定を齎し、世界同時不況の中、世界に先駆けて景気浮揚を成し遂げたといわれている。また結果として自動車通行可能となった 2 代目万世大路が完成し道路整備につながったということがいえるであろう。

（※『奥羽本線福島・米沢間概史』進藤義朗著　平成 13/2001 年 1 月発行 24 頁）

〈写真№4〉

高橋是清（総理大臣・大蔵大臣）

国会図書館

巻末参考資料－2

○『東宮殿下行啓記念事業ノ概要』抜粋

※原典は表形式になっているが抜き書きしている（写真参照）。
当冊子は（其ノ一）にあたるが緒言はない。

【東宮殿下行啓記念事業】（中野村分）

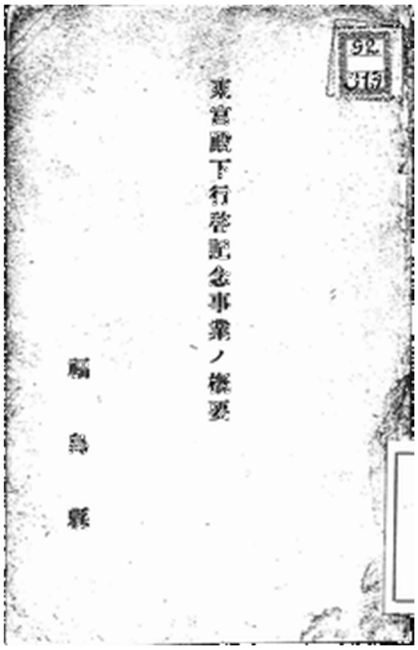
團　体　名　信夫郡中野村

事業ノ名稱　記念碑建設

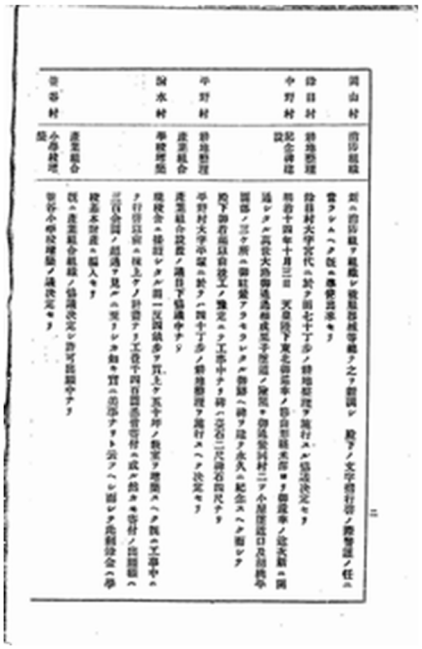
事業ノ概要　明治十四年十月三日　天皇陛下東北御巡幸ノ節山形縣米澤ヨリ御還幸ノ途次新ニ開通シタル萬世大路御通過相成り栗子隧道ノ險阻ヲ御通輦同村二ツ小屋隧道口及胡桃平圓部ノ三ケ所ニ御駐輦アラセラレタル御跡へ碑ヲ建テ永久ニ記念スヘク而シテ殿下御着福以前竣工ノ豫定ニテ工事中ナリ碑ハ臺石二尺碑石四尺ナリ

（拙訳による現代語訳、本文参照）

出典：冊子『東宮殿下行啓記念事業ノ概要』福嶋縣　明治四十一年九月八日発行）
史料出所：『明治四十一年八月　東宮殿下行啓記念事業調』綴、福島県歴史資料館蔵
国立国会図書館ウエブサイト／デジタルコレクション



〈写真No.1〉　『東宮殿下行啓記念事業ノ概要』（表紙）
国会図書館



〈写真No.2〉（中野村事業）
国会図書館

○ 参考『東宮殿下行啓記念事業ノ概要』（其ノ二）抜粋

緒　　言

客秋（昨年秋）、東宮殿下行啓アラセラルヽニ方リ其光榮ヲ記念センカ爲メ、各種ノ事業ヲ經營シ後昆（後世）ニ貽（残）サントスルモノ尠カラス。即チ之ヲ蒐メテ刊行頒ツ所アリタリシモ、其後又陸續トシテ事業ノ經營劃策ヲ爲シ、之カ報告ヲナシ來レルモノ其數百ヲ以テ算フルニ至レリ。而シテ其施設事業タル大小難易ノ別アルモ等シク縣民誠意ノ發スル所豊。夫レ之ヲ永遠ニ傳ヘスシテ可ナランヤ。職ニ局ニ當ル者奮勵努力有終ノ美ヲ濟サンコトヲ望ム。

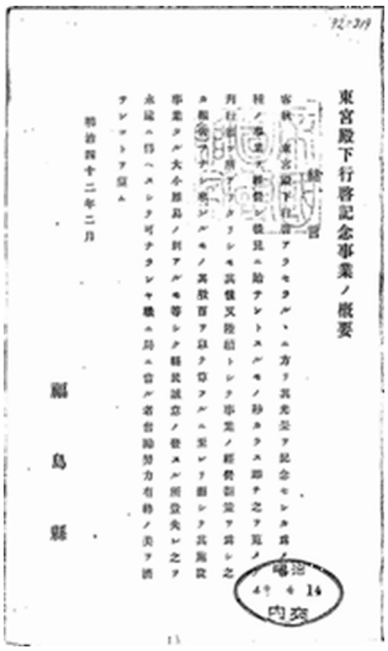
明治四十二年二月

福　島　縣

（1 頁、ルビ句読点、()内注筆者）

出典：冊子『東宮殿下行啓記念事業ノ概要（其ノ二）』福嶋縣　明治四十二年三月二十八日発行）
史料出所：国立国会図書館ウエブサイト／デジタルコレクション

〈写真No.3〉『東宮殿下行啓記念事業ノ概要　其ノ二』（表紙）
国会図書館



〈写真No.4〉（緒言）
国会図書館

巻末参考資料－3

○『皇太子殿下行啓紀念帖』抜粋

緒　言

皇太子殿下天縱（才能）之の御英姿を以て允文允武（文武の徳を兼ね備え）の御高徳を兼ねたまひ深く御心を國運の發展と國民の慶福とに用ゐさせられ、東西に御車を進めて親しく國情民俗を察し給ふ。這度御見學として政治教育殖産等を視察し、風俗人情を覧はし（御覧になる）給はんとて東北行啓のことに御治定（決定）遊はさるゝや東北の臣民等皆雲霓（雲と虹）を望んで歓天喜地（おどりあがってよろこぶ）、以て其日の至るを待ち坐に１日千秋の思あり、愈〻九月八日日光田母澤御用邸御出發、御途すから猪苗代なる有栖川宮殿下御別邸に御微行（ひそかにお立寄り）あり、之れより若松福島靈山等に行啓あらせられ、御歸路には縣下濱通を御通過あらせられたる事とて縣下各地方共に親しく御高風に接するを得たるは洵に千歳の光榮にして政治に教育に殖産に社會萬般（全て）の事業是れより面目を一新せんとす。されば今茲に此盛事を記し奉りて長く記念すと云爾。

（ルビ句読点、（ ）内注筆者。2段になっているのは、原文表示は１行であるが上記の抜粋では１行に収まらなかったもの。）

[84 頁]

○ 9 月 15 日の記　（前文略）

萬世大路御使差遣　此日三十九號國道萬世大路視察として東宮武官**秋澤芳馬(※)**を御差遣あらせられたり。午前七時半御旅館を出發せられ、明治十四年十月三日　聖上陛下（天皇陛下へ敬称、当時の明治天皇のこと）東北御巡幸の際御休憩遊はされし大笹生村菅野六郎兵衛方に御立寄在せられし頃は午前九時なりし。之より進みて中野村字堰場に至りしに村長、村會議員その他數多出迎ありて御案内を爲し、御使には同村圓部、胡桃平、二つ小屋（二ツ小屋）の三箇所に於て　聖上陛下御駐輦（天皇陛下の乗り物がお留まりになったこと）の御跡を御視察の上午後二時杭甲隧道（栗子隧道）福島山形の縣界に至り、山形縣より御出迎ありし縣官の御案内にて同縣萬世村を經て米澤市に御著あらせられたり。」

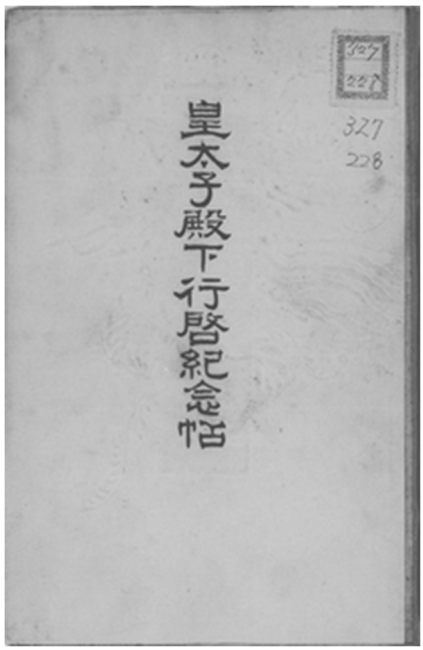
（89 頁、ルビ句読点、（ ）内注筆者。2段になっているのは、原文表示は１行であるが上記の抜粋では１行に収まらなかったもの。）

（拙訳による現代語訳、本文参照）

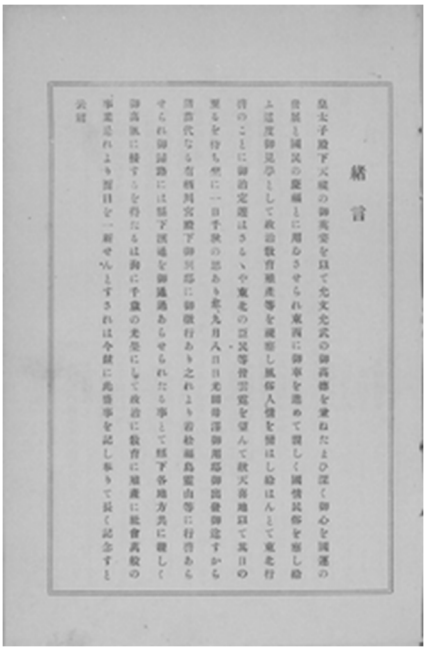
出典:『皇太子殿下行啓紀念帖』(明治 43 年 4 月 5 日発行　福嶋縣廳内務部))
史料出所:国立国会図書館ウエブサイト／デジタルコレクション
参考:『福島縣寫眞帖』(明治 42 年 9 月 7 日　福嶋縣廳)
史料出所:国立国会図書館ウエブサイト／デジタルコレクション
（福島県立図書館デジタルライブラリー）

※【東宮武官　秋澤芳馬】

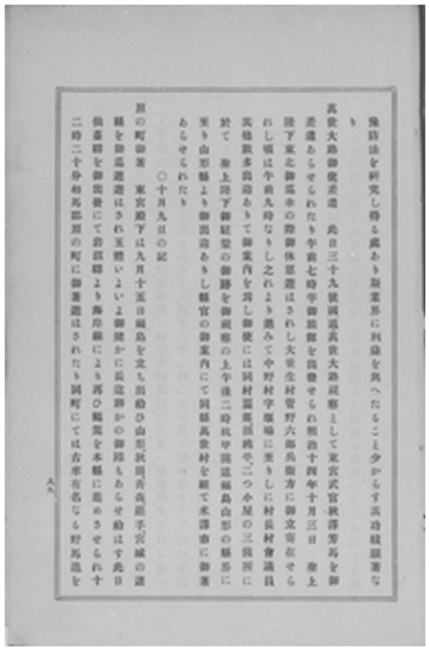
（高知県出身・海軍軍人　明治 2 年〔1869 年〕11 月～昭和 46 年 7 月　101 歳）
・海軍兵学校（海軍の士官養成機関）　明治 24 年 7 月卒業（18 期）
・海軍少将　呉兵団長　戦艦伊勢艦長等歴任
・明治 39 年 2 月～明治 42 年 2 月　東宮武官（海軍少佐、明治 40 年 9 月中佐）
（Web サイト　参拾壱頁（みそひとのぺえじ）より。令和 2 年 12 月閲覧）



〈写真№5〉　『皇太子殿下行啓紀念帖』（表紙）
国会図書館



〈写真№6〉　（緒言）
国会図書館



〈写真№7〉（萬世大路御使差遣）
国会図書館

〈写真№8〉 福嶋縣寫眞帖 （表紙）
国会図書館

別添参考図

万世大路変遷概要図

昭和41年5月29日 栗子国道開通記念スタンプ
（福島中央郵便局）

（栗子新道）
万世大路　延長L=48.3km　《明治の新道開設》
開通式：明治14年（1881）10月3日
施工時期：明治9年11月～明治14年9月

刈安新道L=18.5km　（山形県施工）
刈安 新道工事　明治9年11月～明治14年9月

中野新道L=29.8km　（福島県施工）
中野新道工事　明治10年7月～明治14年9月

《昭和の大改修》
（万世大路）　延長L=14.4km
開　通：昭和12年（1937）5月10日
5号国道（万世大路）改良工事
施工時期：昭和8年4月～昭和12年3月
内務省仙台土木出張所
福島国道改良事務所

（万世大路）
終点：山形県南置賜郡米沢今町（相生橋左岸）
（現在　米沢市相生町）
（L=4.8km）（L=9.6km）
（現福島市飯坂町中野）
起点：福島県信夫郡中野村
（現在　福島市上町）
（万世大路）
起点：福島県信夫郡福島町通十一丁目（里程元標）
終点：山形県南置賜郡万世村大字梓山（すぎやま）
（現米沢市万世町梓山）

山形県

米沢北IC（仮称）
米沢市
相生橋（あいおいばし）
米沢
花沢跨線橋
旧万世小学校
駐蹕之碑・万歳の松
米沢八幡原IC
栗子国道（万世大路）
東北中央自動車道（福島JCT～米沢北IC）
水窪ダム
関根
羽
線
大沢
滝岩上橋（たきいわかみばし）
工区境界
1町（109m）
⑬ 万世大路
栗子山（地理院）1,217m
栗子山（杭甲嶽）1,202m
栗子隧道
L=876.3m（870m）
大平
二ツ小屋隧道
L=353.6m（384m）
栗子トンネル
L=8,972m
二ツ小屋
赤浜
2,675m
西栗子トンネル
（赤浜路）
明神峠
（明神峠道）
御駐蹕記念碑
鳳凰駐蹕之蹟
1,003.3m
鉢森山
新沢橋
東栗子トンネル
2,376m
大滝・鳳凰駐蹕之蹟
御駐蹕記念碑
栗子国道（万世大路）
東北中央自動車道
円部・御駐蹕記念碑
中野小学校
飯坂温泉
飯坂街道（福島交通飯坂線）
399
13
飯坂中通り
（R13大綱）
R13大綱
大笹生村
御小休所
大笹生IC（仮称）
福島JCT（仮称）
平野交差点（幻の飯坂陸橋）
第一中学校
東北本線
合倉
④ L=700m
信夫山トンネル
骸骨山
第4小学校
※福島市
福島県庁
（里程元標）
道路元標
大原総合病院（新）
※ 現国道13号起点
国道4号舟場町交差点
京
（栗子国道改築）
起点：福島県福島市森合町（祓川）
（栗子国道改築）
（現米沢市東1丁目）
米沢市信濃町
至 米沢市万世町大字刈安字川越石
板谷峠（大野供養碑）
板谷
産ケ沢国境（蟹ケ沢）
赤岩
李平宿（福島）
▲高津森山 664.5m
米沢
李平
街道
泥清水寺
庭坂
大字中野字畑石
福島市飯坂町
自
東北自動車道
福島市飯坂町平野
自
福島県

栗子国道（栗子ハイウエイ）（1966年）
昭和41年5月29日開通
L=20.1km　施工時期：昭和36年10月～昭和41年5月

平野地区　信夫山バイパス
昭和43年1月9日開通　L=5.7km
L=4.7km

山形工事事務所 L=9.3km
東北地方建設局 福島工事事務所 L=30.5km

栗子国道　延長 L=39.8km　《栗子国道改築》（栗子ハイウエイ）
施工時期：昭和36年10月～昭和45年4月

信夫通り L=1.3km
平和通り L=0.6km

（信夫山バイパス、上り線 L=5.7km）
昭和50年（1975）3月29日開通
（信夫山バイパス、下り線 L=5.7km）
昭和45年（1970）4月8日開通
（信夫通り L=1.3km・福島県都市計画道路）
昭和44年（1969）4月1日開通（3/29国道13号区域変更）
（平和通り L=0.6km・福島市都市計画道路）
昭和27年（1952）頃までに一応整備
昭和28年7月7日国道4号に区域変更
（昭和48年（1973）4月17日国道13号に区域変更）

凡例
- 初代 万世大路（明治の新道開設）
- 第2代万世大路（昭和の大改修）
- 第3代万世大路（栗子国道・現国道13号）
- 米沢街道（板谷街道）

二つの栗子山
＊「栗子山（地理院）1217m」は、国土地理院（旧陸地測量部）発行の地形図（5万分の1、2.5万分の1）による。
＊「栗子山（杭甲嶽）1202m」は、地元（万世、大滝）の方及び「三島文書」等で云う栗子山です。

＊本図は、万世大路研究会作成のものである。
＊事業名として表示している《明治の新道開設》《昭和の大改修》《栗子国道改築》は、作成者が個人的に使用しているものです。なお、「栗子国道」は当時の建設省の正式な改築事業箇所名である。

『栗子峠にみる道づくりの歴史』
「米沢～福島間栗子峠の変遷略図」を基に作成